

祝詞一言攷

水穗

明治四十七年十一月

97

510

(M)

014519-000-5

97-510

祝詞一言攷

上園(卜部)実久/著

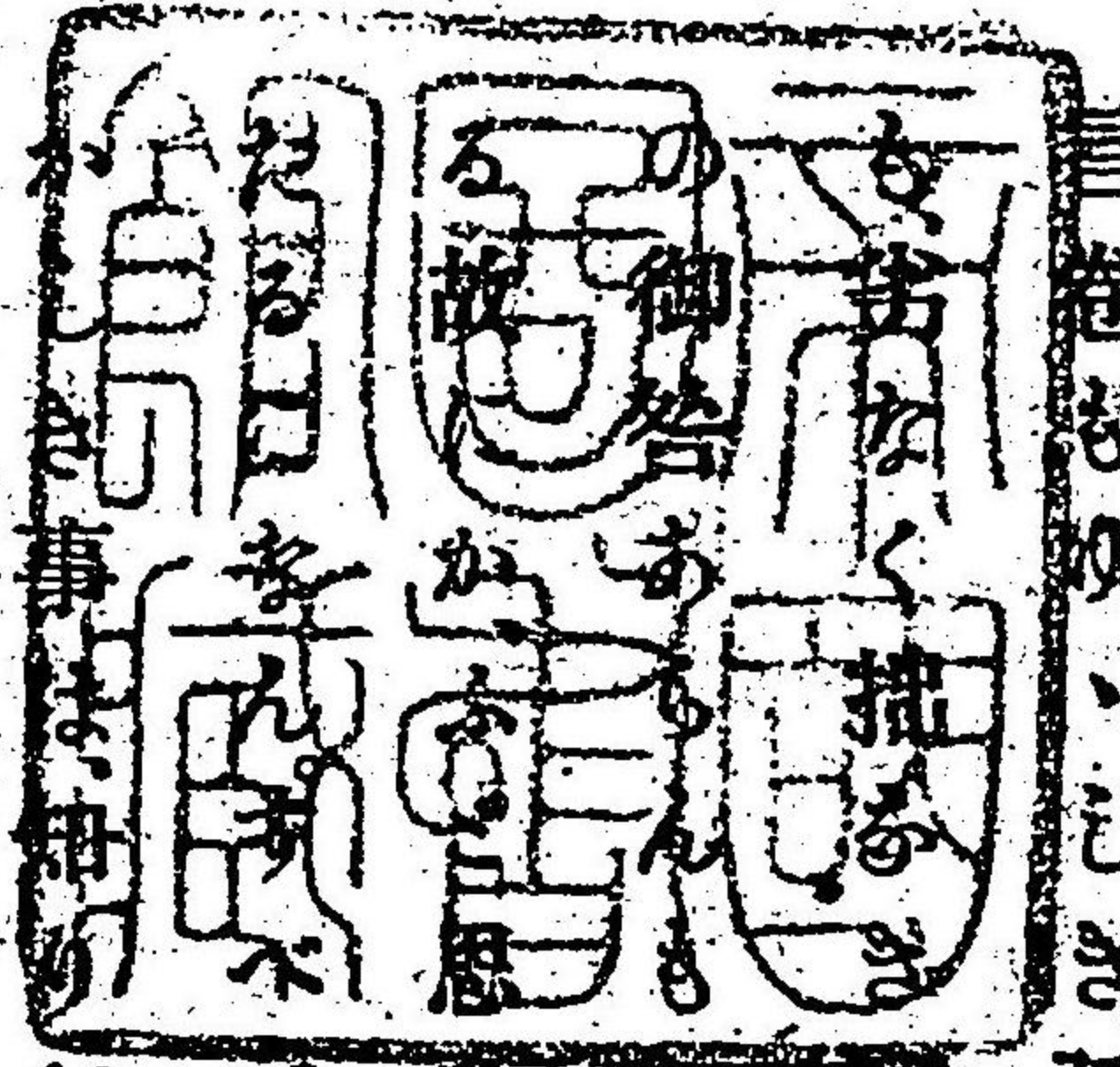
M40

ABB-0897



平年人の修業記  
を  
ついでに  
おまへに  
おまへに  
おまへに

序文



言卷もの、しき、延喜の御式書にのせられたる祝詞は

も、昔なく拙き貴久らが、ごにかくに論ひけがさん

の御答、あもんもはかりがたく、をづく、い

る故、か、ひたちらるがやみがたくて、かくは物

たる、事、人、の、さ、ご、り、は、限、り、あ、り、て、こ、ま

かにをこがましくしれたるわざにて、二言のうへにてあ

かりたる事をし、かく一言にこき出でたるは、見る目も

るさく、むつかしげなれ、外國人の物、見たる、顯微鏡とい



ふものゝごふごはやくあき物のやうあれごまごはやく有る物あり。たのが書は、委しきやうにてあらく、猥りあるごごがあられば、顯微鏡あごにたごへんは、おほけあくいご異あれごちごのひごつは、道の爲、人の爲にもなるべき事もや、ごたもふにあん。浦のあま、谷の木こりのいふ言も、捨がたき事ある物にしあれば、なべてのつたなきは、見おほむ、聞おほして、たま〜に取るべき事あらんを取る人もがあごごひねぎつご猥りあるはじがきをも書き加へつ。時は明治廿三年十二月

上 園 實 久

### 附 言

一予が一言の意を解くと予が神名臆断に物し始めたる如く平田大人の古史本辞經の説に基きたるなり故れあはうらいはうりの約あご云へるごごふごいぶかしく覺ゆべしかの書に就て知るべし

一予身貧しきはさるものにて故有りて旅のやごりに在るが如く書籍もたらず空に覺ゆたるをも交へて猥りにかまこるしたれば引用たる書も違へること有るべし本書につきてよく致へてよさて近年出来たる

祝詞略解に依りて記したることあり祝詞講義をば

予見たるをなし右の書に引けるを亦引きたるなり

一考云へるは縣居大人の祝詞考後釋云へるは本居

大人の太祝詞後釋出雲國造神壽後釋記傳云へるは

古事記傳史傳云へるは古史傳講義云へるは祝詞

講義臆斷云へるは予が神名臆斷のとあり

一訓は平田大人の祝詞正訓に依れり

一此の書は一言の理を解くが旨趣あればなべての文意

は大かたいはずたまたま云へるは止むを得ぬ故あれ

ばなり

一神名臆斷にも云へる如く予は心短きうへに病がちに

て漢學は更なり皇國學もあさず歌の道のかたはしを

學びたるのみなれば斯る書なご作り出さんはおほけ

あきしわざあれば兒も手を拍ちて笑ふやうあると多

からん見直し聞直してよ

祝詞一言攷一之卷

卜部 實久 著



祝詞のはららの約口中動き潤ひて言の滑々と寄成て出くる意りはらりるれと活く  
言じて有在の活機にて一言を總べ助けたる言也きは臆断に云へるとあり攷へ合すべし  
をばりらの約にてたぢつてその五音聯なりて強き意あれば其のる言を強く慥に指して  
云ふにて利き意なきを告戸言と聯ね云ふ語にて本居先生の説の如く告解言と云ふ意  
に見ても其解くは聚まれるを開く勢にて強き利き意なり何れにしてもと云ふ言は強  
く利く慥なるを指す言なりなほ臆断攷へ合すべし

祈年祭とし、田寄の約にて天皇に神の依さし給ふ稻穀の意の由本居先生云はれた

り田はつらの約聯なりて境界あせる意寄はよはゆるの約搖ぎ集る意しはすりの約凌々  
 と進め合せ締統る意なりさしすせと活きてみる同意なりこひは乞にてこは疑る意にて  
 疑るは寄なり隠と云ふこと集め寄する意ありひはふりの約奮動き觸含み寄意ありはひ  
 ふへと活らきてみる同意あり故れこひとは云々の事を神にまれ人にまれ依屬願ふ意な  
 りのはぬろの約上言を滑々と動かし延し寄せ續け下言との間を成し持てにはなり祭は  
 まはむらの約聚り寄意つは聯なり寄意りはらりるれと活らきて上言の意を總べ助けた  
 る言あり故れまつりとは神に仕へ奉恭順の意にて神に寄に從ひ聯なり付謹む意なり  
**集侍** 近藤主の大祓執中抄の説もさることあれどおのれ思ふにうは動く意にて動く  
 は寄なり物動けばかにかくに寄理なり集るあり渦跪 埋もご集り寄る意なり思ひ渡  
 すべしこは疑にて疑も集るなりあはれば疊なはる備あはるなど云ひてあは成にて成は

寄なり物相寄すは成理なし馴撫あははふらの約觸含む意にて合ひは集るなりればらり  
 るれと活らきて上言を總べ助けたる言なり故れなはるとは寄集り形象あす意にて疊な  
 はるは疊める形象を云ひ備なはるはその一言に揃意有て揃へる形象をなはるとは云ふ  
 なりさて今のなはれるのるはらりるれと活らき言にて有の活機あり上のれも有の活  
 機なれどこは一聯の語あれば異事なり抑うこあはれるとは實に集侍の字よく當りて親  
 子等の寄集れる有り状を云ふにぞ有りける  
**神主** かむはかみの轉かは彼の意の指詞みはむりの約聚り寄體なす意身實あご思ひ  
 渡すべし故れむと轉るなりなほ神の言の意臆断に委しく云へり主はぬは滑々と動かし  
 寄せ集る意貫くぬく連ぬるなどのぬ思ひ渡すべししはすりの約統締りて慥なる意物の  
 主たるものは物を統集め締りて慥なる意あるものあり

祝部等 祝部ははふるの約下のふと同意重なりて振々意にて神靈を振動かし招く  
 意ならむか神を遷座するをより奉ると云ふ言ある思ひ合すべしさて放と云言振動か  
 し散す意にて今は此の活言の體言となりたるなりさてりはらるれと活きて上言を總  
 べ助けたる言なり此愚説いかいらん講義に祝部は神主に次て其社の事を取る人あり  
 されば侍在の義なるべくや云々とある説もうべあるに似たれど侍在を五音は通ふもの  
 からはふりと云ふもいかあるやうにてうへをひ難くやされば此の説も愚説もともに  
 究めて善しと定めがたし人々よく致へら等はどはつゝの約聯なり集る意もはむろの約  
 聚る意故れともとは聯なり聚れる一部と指す意なり清て云ふとも又友も同意なりさて  
 此の等の字をらとよむとありされどらは余り卑め過ぎて聞ゆればともとよめるぞよき  
 ついでにらと云ふ言の意を云はんさるはらるるの五音有在の字の活機にて物顯れ

在形象を指し且つ舌末音にて諸言を総べ括る言あるが故に一部分の事物を指てらと云  
 ふなり我等彼等の如きれとも云へり又我をまると云ふが本語にて汝をみましと云ふま  
 りろは等と同意あり

諸 もはむろの約聚り寄て部なす意ろは上言を總べ括り助けたる言なりさて二言重  
 ね云ひて群たる意を強くせる言なり

聞 こしはきの延言にてきありさてかきくけこの五音堅く強き意ありてきはくり  
 の約旋々と堅く強く慥に動き寄當る意あり故れきとは耳に音響を慥に強く寄當嚴し  
 くこたへしむる意あり俗に心強く嚴しく勵しきを氣がきくとも云ふ思ひ渡すべしさて  
 きかんきくきくきくきくきくきくきくきくきくきくきくきくきくきくきくきくきくきく  
 て云ふ言は大かた敬ふ意と愛しむ意とに開ゆさるは言急なるは卑劣鹿漏に延びて長き



は貴く嚴なるより自然敬ふ意愛しむ意に聞ゆるなり

食 〇めは聚の約聚るは寄ありせはすれの約交々〇進め寄せ縮統る意ありさしすせと

活らきてみな同意なり故れめせとは事物を進め寄せ縮統付る意なり

登 〇つろの約言を強く聯ね受付るてにをはなり

宣 〇祝詞ののりと同じ

神主祝部等共稱唯餘宣准此

稱唯はをはうろの約動き折寄意を重ねて上件の言を慥に心に受寄付く應聲あり尾は物

の末に寄竟締りたる意緒は締寄たる體男は其の氣の一と筋に寄締り強き意にて女の氣

の二た筋に亂れ柔ある有り様に對へりをと云ふ言み寄意あり

高天原 〇高はたは足る意かは重なる意物足り重なりて高くなるなり天はあめ〇略り

轉れるにてあは彼の意の指詞めはむれの約蒼々たる天の形の聚々圓々としたるを云ふ

委しくは臆斷に云へりさてま〇轉れるはまは滿初言にてあの開音の韻あり大きくて

下言に冠らするに調よくめは滿令言にて言狭く迫り窄りて下言に冠りがたく調よか

らねば自然は轉れるものなり竹を竹葉酒を酒杯を〇轉し云ふ類多し五十音第四の音は

みな令言にて狭く小さく第一の音はみ〇初言にてあの開音の韻あるが故に大きく廣く

言の上に冠らするに調よき故に轉し云ふなりよくよく致へ渡すべしのは既に云へりぬ

ろの約上言を滑々と柔に聯ね續けて下言との間を成持てにをはなり原はははふらの約

奮動き張りて晴々としたる有り状且つ一と所と界して含孕る意もありらは上言を總

括り體をせる言ありさて此の高天の原は北極紫微宮を始め日の御國をも云ふ爾はぬり

の約上言を滑らかに受荷ひ乗せたるてにをはなり乗と云ふ言のはぬらの約物強くそば

そばしからず滑らかに寄付る意あり思ひ渡すべし

神留坐

神はかみの轉なること上に云へるが如くなるが然轉る故はかみと云ひては

みの言締りて細く體に居るをむと云へば斑々と大きく用き活らきて下言によく聯なるが故あり此の言牙より出てかぶとも云ふも太く用き活らく言にてむと同じ留はつは聯なり付意まはむらの約聚り寄意りはらりるれと活らきて上言を總べ助けたる言あり故れつまるこは聯なり聚り寄集る意なり坐はまは聚の約聚るは寄意すは進み寄締り統り居る意さしすせと活らきてみな同意なり故れままこは高天の原に寄締り統り居り給へるを體に指す意あり此の意より轉りて廣く神人の事業を敬ひて云ふ言となれり

皇

すは總統る意めはむれの約聚しむる意らは上言を總括りたる言あり故れまめら

とは大君の天下の專物を聚寄せ總統賜ふ意なりがはくらの約組締り堅く體をす意にて

上言を堅く指當組積けたるてにはなり

睦

むつはむは聚り寄意つは聯なり付意にて神漏伎神漏彌の命は大君に親き由也

神漏伎命神漏彌命以

神は既に云り漏は上言を總括りたる言伎はくらの約かき

くけこの五音堅き意ある故に物組集り堅く體をきて體に在を指す意にて君のき也のはてにをば既に云へり命は二たつ共尊稱にあらず兩神の仰せ賜ふ由を云へるにて御言あり御は滿る意の美言言はこは心とはつろの約聯ある意にて言は神人の心の聯なりていひ出るものなれば云ふ神漏彌の彌はむりの約女陰の形象の一とつに締らす二つに分れて聚々と有り婦人の有狀の堅く締りて強からず聚々と亂れたる如く柔に見ゆる意にて婦人の稱あり故れめとも云ふむれの約なり委しくは臆斷に云へり

さて神漏伎神漏彌とは皇產靈男女の兩神を指せり但し轉りては天照大御神又皇祖あら

の神をも云ふこと講義の説の如くならん以はもはむろの約聚かり寄意ちはつりの約聯なり付意たちつてと活らきてみな同意あり故れもちとは持も同義にて物にまれ事にまれ寄聯ね付る意にて手して物をもつは手に受寄せ職ね付る意なりさてこは両神の命に寄てと云ふ意ありてはつれの約上言を強く聯ね續くるにてはなり見聞しことを見つ聞つなご云ふつは此のての活らけるありてにをほの書類致へ見るべし天社國社登天はあまは既に云へりつは上言と下言との間を聯ねて強く立持てにはにて之に通へり社はやは屋にて屋は屋根を覆ひ重ねたる様を云にて彌の意しは締りて慥なる有り狀ろは上言を總へ括りたる言にてしろとは實物など云ひて堅く締り慥に躰なせる事物を指す言にて今は御屋所の有り狀を指せり國はくは組意には集る意にて物の氣を集め調ふるを煮る練るなど云ふこれなり故れくにとは一と所と境界して組集めたる意なり登

はつろの約上の聞食登と同じてにはなれど聯ね約め定むる意こもりて登爲而と云ふ意に見るべし

稱辭竟奉 稱はたはつらの約聯ね寄る意を二たつ重ねたるありへはへふと活く言

にてふれの約含め寄る意故れたへとは事物を満足はす意辭は既に云へり竟はをほうろの約動かし折寄せ治る意へはへふと活きてふれの約含め寄せ總ぬる意故れをへとは事物を折寄せ總ね治むる意にて竟終などの字の意になるなり抑稱辭竟奉と云ふ言は神を祭る祝詞は事物を満足はし盡し極めて申す故に云ふにてやがて神を祭ることなる由先哲の説の如し奉は祭と同じく寄從ふ意にて神人に仕ふる意より尊みて云ふ言とあれり

皇神等能 皇は上に云ふ如く統る意にて神は萬物萬事を統掌意にて講義の説の如く

必らず天皇の御祖と申す意にあらず尊稱なり等はたはつらの約聯なる意ちもつりの約  
同意にて聯なり集りて躰あす意にて一部を指す言なりさてたちと云ふ言正しく立て殿  
なる意ある故に大かた高貴の神人を指て云ひ卑き群にはども又らとも云ひ又廣く事物  
の群集れたるを指してともと清て云ひらとも云ふなりあほ上に云へること致へ合すべ  
し神も能も既に云へり

前爾 前は眼方にて先哲の説 尻方に對へる言にて眼は聚の約聚かるは寄にて眼は物  
の色の寄移るものなれば云ふ故れまはめの轉あり芽と云ふ言も草木の氣の聚寄動き出  
て躰あせる意也思ひ渡すべし又まは眞の意にて前を方の正方と云ふ意あらむもしらす  
扱はまはむらの約聚かり滿て動かぬ意也又眼も眞も同意ならむも知るべからざるは眼  
は面躰の眞中には無けれども面躰の主たるものなればあり方はふれの約合りて一方て

躰あせる意爾はてにはにて既に云へり

白久 まをすの延びたる言にてまをすはまはむらの約聚かるは寄意をはうらの約動

き寄折終治る意すはさしすせと活らく言にて交々を進み出る意且つ上言を總結れる意  
もあり故れまをすとは言美しく寄成調ひて口の中より進み出る意なりされば云と同意

ながら言おろそかあらず恭ひ謹みて上たる神人に云ふ有り状なり

今年 今は此にてつねにこのと聯ね云ふのはてにはなりさて此は凝り寄て事々物々  
と體をなせるを指云言あり年は稻を云ふと同じの春稻の種まきて秋實のり冬かけて蒔

取り一年に稻の功成るが故に云ふにて田寄の意あり

二月爾 萬葉別記に云へるを此の書今もたらす空におほゆるに來更還りと云ふ言の  
約れるにて寒さの更還る意と解かれたりとおほゆる來の言かく解かれたるやうにおほゆ

れど少しおぼたばし或人云ふ上のきはくみの約下のきはつきの約にて組更月にて冬ご  
もりし草木あごの更に改めて芽ぐむ意なりと云へりこは平田大人などの説にや別記の  
説よりはまされるかいかあらむ月は日の御國とく切れ離れて後尙此の地球に附きて  
有りし故の名のより先哲の説あり

御年初將賜登爲而

御は既に云へり年も既に云へり初はははふらの約奮動き張  
開き顯はるゝ意しはすりの約進み出る意走と云ふ言思ひ渡すべしさて物の始あらぬ末  
終をも端と云ふしは進み寄統締れる意にて同意に落るなりめはむれの約めむと活らく  
言にて斑々と散らし動し出だす意なりむと云ふ言聚かり寄締るをも云ひ搖ぎ動き散を  
も云ふ物の皮などを除け去るをむくと云ふ思ふべし委しくは臆断に云へり故ればじむ  
とは事物を張り開き進め動かし出だす云なり賜はたはつらの約聯なる意まは聚の約聚

かるは寄意ははふらの約含む意にてこれも寄意はひふへと活らきてみな同意あり但し  
上言を含み寄せ奮動かす意と見るかたよきか故れ賜とは高貴の神人より下たる人に事  
物を聯ね付寄る意にて伊邪那岐の神の天照大御神に御頸玉を賜へるより玉によりて賜  
ふと云ふ語は起れるかと云ふ先哲の説さもあらむか玉てふ言もたはつらの約聯なる意  
まはむらの約聚かり寄體あせる形象を云ふなりさて賜と云ふ言右の謂より轉りて高貴  
の神人の作事業を尊みて云ふ言とあり又轉りては自のうへに云ひてそれやがて人を尊  
ぶととなれり中古の書類致へ見るべし抑こゝの賜は大君の農業を百姓にせさせんとし  
賜ふあり將は將然言にて聚かり寄意にて物を然爲むと思ふは精神うと動き潤ひむ  
と聚り寄うむと思ひて爲出るあり故れ後世此のむを鼻に掛けてんと唱ふるにうの韻も  
自然こもれりさて此のむめとも活らきてめむれの約同意なり登は既に云へり爲はす

りの約俊々と進み寄摺合ふ意なりせしむと活らきてみも同意なり人の事業をなすは精  
神二たつ相進み動き寄俊々と摺合ひて思ひつゝ且つ大かた兩手してするなり何事も成  
るは二たつ相寄て成るなりさて又もさんあしなすあせと活らく言さしすせは右のせし  
すと同意にて成てふ言の添ひたるにて寄成意あり抑も今は賜はんとてと云ふ意なるを  
御年初め賜は御年を作り爲由なればしの言を加へて言を慥に云へるあり而は既に云へ

皇御孫命

皇は天皇命皇神などの皇と同じ御孫は御眞子を略ける言にて麻奈古

と云に同じ萬葉に母の最愛子ぞと詠ると同じく愛親しみ稱たる語なり故れ皇美麻命  
と申すは天ノ忍穂耳命の御事を詔給へるが始にて大御神の日嗣を知食す御代々の天皇  
命の大御名となれりと史傳に云へるが如しまはむらの約聚かり満る意眞は偽り亂るの

反にて正直に堅く満て動かぬ意なれば眞實に子とすべき子と云ふ意か又物の満るは善  
きとなればみと同じ稱言か何れにまれ稱る意は同じ命とはみは御にて満る意の美稱こ  
とは事にて其と指しあてず大やうに云ふにて後世殿様と云ふ意の尊稱なり委しくは  
臆断に云へりさて事はこは心とはつろの約聯なる意にて事は神人の心の聯なり動きて  
作爲故あれば云ふこれ又臆断に云へり

宇豆能幣帛乎

宇は移など云ひて動き寄意浮は上へ動き寄なり渦埋あど動き寄集  
る意なり豆は聯ある意故宇豆とは寄聯ある集り満て渦高く嚴く大ある美稱なり宇頭の  
御手宇都の御子なども稱へ云へり

御手宇都の御子なども稱へ云へり  
御手宇都清みては御手にて天皇命の御手づから神に

献り賜ふよしくらは古へ神に献り人に贈りあどする物を凡て久良と云へり  
世の語に物に物を興ふるを久流と云ふも是より出たる事あるべしと云ふ本居先生の説

よきか人に與ふるをわくとも云ふくるにおのそへるなり  
 さて手は手をあたと云ふあの略りたの轉れるにてたはつらてはつれ共に躰より聯あれ  
 る意委しくは臆斷に云へりくらははくは旋々と動し寄る意にて來と同意ならん來とは彼  
 より此に來るを云へ此より彼に行くをも參り來るなど云ひ右に云ふ人に物あたふる  
 をくると云ひおくのくも同じく自他通ふなりけりらは上言を總へ括りたる言なり  
 さて又萬物を置座に充て奉る意と云ふ縣居翁の説によらばみてはみたせの約にてみ  
 はむりの約聚り寄意たはつらの約聯あり集る意せはせずと活らく言にてすれの約寄總  
 統迫締る意にて令の字の意あり但しかゝる語の續き外にも多くみたせの約など解く  
 は古説にてあることにはあれど實は然る迂遠なる義理にはあらで自然満たる意あがら  
 満らると云ひてはちの言細く締り体に居りての言の用言にて旋々と圓く大きくて

聯あり難く又みたくらなども云ひ難きより自然にみてと轉れるならむも知るべからず  
 さてくらは献物の臺にてくは旋々と動かし寄る意にて突付直組まごのくにて物を寄せ  
 宛つる意が藏まごも物を隠寄せ置く意か又はた組立てたる形象を云ふか股ぐらくら  
 谷などのくらも寄組たる處の意暗しと云ふ言も日光などの餘りに光りて終にかき旋し  
 寄暗くある意なりらは上言を總へ括りたる言ありさてかく致へ定めて見るにまほ上の  
 本居先生の説のかたにおのれは心ひかる

手はうろの約動き折寄意にて何にまれ折終治締て堅く強く體に体なせるを指す言に  
 て今は上言を折續け強く體に指せるてにはあり故れかゝる處のてにはならで吾兄を人  
 ならば云々の倭建の命の御歌の如きよに通ひ或は人に見せんと云ふことを人に見せ  
 んと云ひ又山の高きを山を高めなど云ふがに通ふなどさまさまのてにはあれど其の事

理を折當強く慥に指すにしてみな同意に落るなり

朝日能豊逆登爾 朝はあは 顯在物を指さ彼の意さはすらの約天津日の此の御國

の女陰をせる處より抜けて姿々さらさらと進み騰れる時亦も此世の朝の始にて此の謂より朝てふ語は出できたり委しくは古史本辭經に見えたり日はふりの約彼の女陰なせる處に含りて奮動けるより云ひて今はた眼前其の光の奮動くを見よ豊はとはつろの約聯あり集る意よはわろの約搖ぎ寄集る意故れ滿る意の美稱あり逆は假字にて榮の義なりさはすらの約物悪く柔り亂れ濁ることなく凌利く氣進みすらすらさらさらと勇清く成り立意かはくらの約物の氣の堅く旋々と動き寄組立つ意芽組など思ふべし亦咲と云ふ言拆と同じく開く意あれば旋々と動き開く意に見んもよき方下に云ふと致さて榮はさかと云ふが本語にてえぬなどは添ひ活く語あり故れさかゆくと云ふ語古今集に

見えてさかえ行くのえの省れるにはあらでゆくはえゆと同じく添ひたる活語ならむと云ふ妙支寺義門の説ありさるとあり抑もさかはさかかるとさかるとと活らきてみな同意にて所謂咲と云ふ言にて榮の本語ありさてさかはさかの轉れる躰言なり登はのはぬろの約滑々と動き續き延る意なりほはふろの約奮動く意りは上言を總へ助けらりそれと活く言のさしあたりて躰言となりたるあり故のぼるとは物高く長く延續き奮動き上る意なり

稱辭竟奉久宣 奉久はまつるの延たるなりさてると云ひては言柔に統り窄りて聞

ゆるをらくと云へばらの言總へ初言にてあの開音の韻ありて大きく太く聞えくもかと通音堅く強く旋りと大きく圍めるさまに聞え勢ありて登の言のつろの約強きに續くにしらべよければありさて講義に集侍云々宣と云ふ途は宣命にて神主等に云詞高天原よ



りこへの稱辭竟奉久までは神に申す詞登宣は神主等に云詞にて上の宣命の括りにて神に申す詞と其事を行ふ神主等に云宣命とを一つに擧たるものよし云へるは諸なり  
御年皇神等能前爾白久皇神等能 上に出たる言共なりさて御年皇神等の意は穀を司り給ふ御年の神又御父大年の神又御子神とます若年の神も葛木の御歳神社に鎮座すこと疑なしてふ講義の説にてよく聞わたり

但し外にも穀に預り給ふ神たちは自ら依り集ひて此の御祭を受賜ふべければ大らかに云へるにもあらんか

依左奉奉 〇〇〇〇〇〇の延なれど語のまゝに解かばよはゆるの約搖ぎ寄付意さはすらの約進み寄迫り統意しはすりの約これ又迫り統り締る意さてさしと活きさてみな同意なり故れよとすとは事物を寄せ付る意あり奉奉の奉は將然言にて上の御

年始賜奉の奉に同じさて下の奥津御年に續くとありさて穀は御年神のつねに依し賜ふなれば奉留奥津御年と極め云ひても聞ゆるとあれど然言ては言開かず締りつまり且つは二月の祭にて其年に取りては未だ穀のあらざる時なればかたがたもて奉と將然言に大らかに云へるあり

奥津御年乎 五穀の中に稻は最末に熟る故に奥と云ふと致へ云へりおはうるの約動き押し延て避り遠退て近き方より勢弗に凡らかある意海の沖奥山などは近き方に避りて遠く勢弗に凡ある意後は先に對ひて遠き意遅きは早く進めるに對ひて遠き意心の遅きなど進みて俊速く強く堅く密に締れるに對ひて弱く疎ある意なりきは上言の意を極め定め躰なせる語なりくと云ふも通音組などのくにて限り極め集めたる意なり津は上言を強く聯ね立持言にてあまつ社のつと同じ

手肱爾

手はあ。たの略語既に云へり。なは之の轉之は成終言にて言締りて少さく弱く

なと云へば成初言にてあの開音の韻有りて大きく強きたの立初言にてあの開音の

韻あるによく續きてにをはの如くもあらず一聯一体の語の如く聞は又肱のひの言のふ

りの約にて強く奮動き又太く含りちの言もつりの約強く聯なり力ある一聯の語によく

續く故なり試に女のひぢと云へばののろりとしたるてには耳だち言切れて勢なしよ

く味ふべしこはふとれもふまをいさか云ひ出せるありあべての言語此の氣韻あり

人々よく致ふべしるもろもなはぬらの約上言をぬらぬらと滑らかに言ひ續けて一聯の

語の如くあせるてにはなり之の言のぬるの約なる意上に云へり致へ合すべし肱はひは

ふりの約含り寄れる意ちはつりの約聯なり釣れたる有り状を云ふか又ひは奮動く意も

こもれるか

水沫

水はみは満る意又た美稱にても有るべしつは聯あり凝る意津吐の津と同じ

委しくは臆断に云へり今はみづの畧ありあは之轉上と同じく氣韻によりての轉なり沫

はあはうらの約動き顯れ在ものを指す彼の意わはうらの約動き潤體なして浮べる意水

の潤より出たりさて今はあわの略なり

畫垂

畫は字は假字にて攪の意の由古史に云へり攪は手して爲るを云ふにてか

くらの約さもくりの約手を旋々を動かす寄せつものする意なりさてかかきかくか

けと活らきてみな同意なり垂はたはつらの約聯ね續くる意りはらりるれと活らきて上

言の意を總べ助けたる言さてたれたるたるとも活らきて同意なりさて講義に

田に苗を植るに水沫をかきたらすとありとあり

向股爾

私起に兩股是正相向故云向股耳とありと記傳に云へり向はむは

聚あひかり寄よ意いかはくらの約やく旋くる々と動うごき寄よ意いかきくけと活いらきてみま同意どういなり故ゆれむくと云ふ言は此方にまれ彼方にまれ事物動うごき寄よ聚あひかり當あたる意にてこゝは兩股りゅうこ近く寄よ並な立てるさまなりさてむきとかむくとか云ふべきをむかへと云へるは例の氣韻の轉まり股こはもはむろの約やく聚あひかり寄より含くらかに體たいをせる意い合あ處ちを俗ぞくに含く々と重かさね云ふと同理なり

泥ひぢ畫ま寄よ氏ぢ 泥ひぢはひはふりの約やく含くり寄よ意いちはつりの約やく聯れんり集ありて體たいなす意いさてひぢは土に水の滲しみりたるを云ふ畫まは上に云へる如くなるが手して泥をかき寄よすことにて「苗を植たる後に草を取棄るさまなり」と講義に云へり寄よはよはゆるの約やく搖ゆぎ掛かる意いせはすれの約やくせすと活いらく言にて迫せま統とう縮しゆる意い故ゆれよせとは物ものごら搖ゆぎ掛かけ迫せま統とう縮しゆ合あす意いなり

取とり作つくり牟む奥おく津つ御ご年ねん乎や

取とりはとはころの約やく聯れんね付つる意いりはらりるれと活いらきて上言の

意いを總もべ助たすけたる言ことなり故ゆれ取とりとは大かた手に附つてする業わざを云ひ或は身に附つてするをも云ふさて講義にこゝは手に採るにあらず天皇に依し賜ふ天下の稻穀の事を百性の執とるありと云へれどそれまでもまきか作つくはつは聯れんね集ある意いくは組くみ意いらはらりるれと活いらさて上言の意いを總もべ助たすけたる言ことあり故ゆれ作つくとは物を聯れんね集ある組くみ立て體たいなす意い牟むは將然言未だ作らぬ前まへあれば云ふさて下につゞく言也かくて上文よりの續つき皇神等の依よ左志奉まう牟む奥おく津つ御ご年ねん乎や云々し其取とり作つく牟む其奥おく津つ御ご年ねん乎や云々とこゝの奥津御年のうへに其字を加へて心得べしかゝる格多したとへばつねに某云ふしかしかと云へり又云へるしかしかと下へ續けても云ふことある云ふてふ言を二たつ重ぬると同じかく重なるを嫌きらひて某云ふしかしかと文字にていひざるは中々に拙ちく悪あきよし本居先生いはれたるうべなり

八束穂能伊加志穂爾 八はいあの約氣進み寄重なる意又ゆらの約と見ても搖ぎ寄  
 重なる意にて彌の意あり束はつは聯ね附る意かはくらの約旋々と動かし寄せ組意此の  
 言を活かしてつがねつがぬを云ひ又擲と云ふ言など此の言の活けるにて手もて聯ね  
 付寄る意なり穂はふらの約奮動き顯れ出て其貌の含りたる有り様なるを云ふ伊加志は  
 伊はうりの約動き氣進みより集りて殿き形なせるを云ふ加はくらの約組集りて強く堅  
 げある有り状態は締り静り慥なる意にてくしきげと活らく言の指し當りて体言とあり  
 たる言なり

皇神等能依左志奉者 者はふらの約上言を奮動かし含寄せ張續けたるてには也  
 初穂乎波 初はははふらの約含みたる勢にて奮動き張り開く意つは強くつと出開く  
 意波はふらの約太く含める有り状にて乎に重ねて初穂を指したる意を強めたるてには

あり

千穎八百穎爾 千はつりの約聯なり集る意にて數分の多きを躰させる言なり穎は

稻の穂を云ふにてかはくらの約組集り堅く形なす意ひはふりの約含りたる有り状故れ  
 穎とは顔と云ふと同義かはは形をし含まれる有り状あり又穎は則ち穂なれば穂と通音  
 同義又飯も同義にてつぶつぶと含める有り状を云ふあらんなは臆斷致へ合すべし八は  
 彌の意百はふらの約含り集りて躰なす意にて數分をさす

奉置氏 たては建立などの字の意にてたはつらの約てもつれの約事物を聯ね集め  
 て強く堅く嚴きさまにもてなす意今は穎を並べたつるさまなりさてたてたつたつた  
 つれと活く言なりまつりは尊稱上に云へり置はたはうらの約動かし寄せ押覆意下落あ  
 ると思ひ渡すべしきはくらの約組など同意にて旋々と動かし寄せ堅く究當付る意なり

かきくげと活らきてみま同意あり

麴閉高知麴腹滿雙氏

麴は酒を醸せるかめあればみはむりの約酒の聚り満る意

かかめののもむれの約物聚り満る意かかほさらけ緒筥櫛笥の類器を云ふけの轉か言の意はかはくらくれもくれの約にて堅く組集めたる躰を云ふか

緒筥の類は更あり土器とても土を集めたるにて組成せる意ありかめのかは同意か異意か致ふべし又思ふに味酒を三輪と續けたる言濁酒の貌をみと云へるなる由日本紀歌の解に云へりとおぼゆて空見れば本書に今俗に番の絞りあへぬをもろみなども云へりみは向むりの約聚れる濁酒の汁の貌を云ふにて酒筥の意か閉は上と云ふと同じく上はうは動き浮騰れる意へはふれの約合り寄躰を意にて方の意今はうの言無きのみ高は既に云へり知はしは灼然く慥なる意りはらりるれと活らきて上言の意を總べ助けたる言

なり腹はははふらの約奮動き張り顯はれて含まりたる有り状らは上言を總べ括りて躰なせる言なり満はみたせの約既に云へり雙はなはぬらの約滑々と動かし寄る意馴撫なと寄觸るゝ意なり思ひ渡すべしらは上言を助けて總べ初むる言へはふれの約合め寄る意にてへぶと活らく言也故れならぶは寄合め合する意ありまべとよみても意は同じ

汁爾母頰爾母稱辭竟奉牟

汁は酒にて總べて汁と云ふ言は物の氣の繁々散々と亂

れ動き潤ひ繁垂繁に縮屯寄集れる意るは上言を總べ括り體なせる言なり母はむろの約上言を聚寄せ續くるてにはあり此れも彼れもよご云ふもは異事異物に寄せ添ふる意のてにはなり裳は腰に聚寄る意物は聚かり寄體なす意など總べてもてふ言は聚かり寄意にぞ有りけるさてこの文初穂をば汁にもし又穂のまの頰にてもまつらむと云ふにて初穂平波より掛りし奉牟にて言切れたり

大野原爾

大はおはうらの約動き寄り集り体あま意にて壓覆義ありははふるの約ふ

くむにてふくむは寄集り太く體なす意あり又壓覆義あるなり故れ二た言締めて大の字

の義なり臆断に委しく云へり野はなにぬねのの五音滑々と寄成意にて貫ぬく連ぬるあ

ごのぬにて寄集る意にて一野と境界なし寄圍める形象を云ふにて國のにと同意ならむ

か

生物者

生はおはうらの約其の氣の動き押寄體なす意ふは奮動き含り寄體あす意に

てひふと活らきてひもふりの約同意なりるはるれと活らきて上言を總へ助け下言につ

らねたる言なり物ほもはむろの約聚かる意のはぬろの約滑々と動き寄意故れ物とは物

聚かり寄成る體を云ふ上の野の言の意致へ合すべし

甘菜辛菜

甘はあはうらの約辛く乾かず潤々として美愛しく口内に受諾なはるゝ

味を云ふ故れ甘きはうまさなりまはむらの約圓聚かり満て口内に善く聚かり寄せらる

味の躰を云ふされば甘とは辛く乾かず潤々として美愛しく又辛き苦き酸きなどの一

とふし方に堅く角ある味ならず圓く満て淡く脆からぬ味を云ふ菜はぬらの約滑々と動

き寄成意は寄成意又馴撫など寄せ付くる意上に云へるが如し故れ菜は飯に寄せ合せて

食するものなれば云ふ本居先生の脱に辛はかは堅く強きにて甘き味あどの如く柔和さ

らぬ意らは上言を總へ括り體あせる言なりさて甘菜辛菜と云ふべきものは考に見えた

青海原

青はあはうらの約天地の氣の初めて潤めき動き顯れたるを指たる言にて彼

の意なりをばうらの約麗はしき意なりさるは青色は天地開け初まりしときよりの空色

にて其の空色は麗雅き氣の薰滿たる泡にて青は則ち泡の活機なり古史本辞の海はうみ

説による

の略にて古史に青海原は萬葉に阿乎宇奈波良とあるに據て訓べし上天つ神諸々の是の漂在國と指し詔へる一の物を廣く見悠かしたる状もて稱へる名あり宇那は字の如く宇美なり音に轉じて宇那言の便に第四の按ふに此は生と本と同言ならむか然るは彼の一の物は産巢日の神の神靈に因て産成し給へる物の初めなりしかば宇美てふ名を專と負るなるべしさて其宇美は宇比と通ひ宇牟とも活らきて宇夫と通へりそは事物の初々しき宇夫某と云ふ多し然ればその産成し給へるまゝの初る原と云ふ義を以て宇那原とは云ふあるべし

かくて後に宇書等を見るに海は天地也さも或は大溟也さも云ふを思へば海さほも大池の支牝たる處を云ふ名あるが弘くなりたるなるべしさて其の支牝たる處はしも万の物を生出すと云ふ意を以て宇美と云ふには非ざるか然もあらば前に云ふと宇美てふ言は同じけれと宇牟と宇麻留々々自他の異りありいづれもらむ猶よく考ふべきなりさて青とは其初々しき時をさして云へる言か其は事物の初々しきを青某と云ふこと多かり育人草の育などこれなり青女房育

侍など云ふことまた見遙かしたる状の蒼々と廣く見ゆる故に云へるか此の二つのうち今定めがたし後人よく考へてよくさて青海てふ本の義はかくの如くにて大地を總稱てふ名ありしを後には海をのみ云ふ言となれり其は式なる祝詞ごにも青海原と云へるは此の意に云へりとありこゝもあやうまばらとよむべきを正訓に右の如くよめるは調を思ひてあるべきにやかくて上の古史の説少し不審しさとあれと生意ならばうは動かし出だす意みはむりの約むき出だす意むくは除き動かし出だす意既に云へりさて又生るゝ意あらばうは動き出る意むはむかれ出る意かくてみはまみむめと活らきてみな同意なり住物者 住はすは進み寄統り締り静まる意さしすせその五音進みて終に静り締る意あり臆断に委しく云へりむは聚かり寄付く意まみむめと活らきてみも同意なり者外の物に對ひ物を強く離ち去りて是はと張り顯し立てたるてにはなりかく強く聞ねぬもあ

れごみな其の意味は有るなりたさへばたゞ人のいふといふとを人はいふなど云ひて  
他に對へる意なきやうなるもあれど其れはた人のいふを張り顯し立てたる意ありよく  
思ふべし上の依志奉波を上言を張り續けたりと説きたれどこれも委しくは依志奉  
らざるに對ひて依志奉る意を主張たる意味なり此の事生者の處に云ふべきを忘れにた  
ればこゝに云ふ

儲能廣物儲能狹物

儲はははふらの約奮動き張り出て含まりたる有り狀たはつ  
らの約聯ありて躰なせる意廣はひはふりの約奮動き開きて太く大きく張りたる有り狀  
ろは上言の意を總へ括り躰なせる言なりさて儲能廣物はひれ廣き太魚を云ふ狹はす  
の約統り迫り締りて小き意せばしと云ふ言を古言にさしとも云へりさて狹物はひれ  
狹き小魚を云ふ

奥津藻菜邊津藻菜爾

奥は沖にて既に云へり津は之に通ふ助辭既に云へり藻は  
むろの約海草の實葉などの聚かれる有り狀を云ふか菜はふらの約奮動き出で張りて含  
める有り狀を云ふさてこは葉にはあらで藻の全躰を云ふにて菜の字をあてたるならむ  
邊は奥に對ひて陸の方に近さを云ふにてふれの約陸の方に含まり觸寄たる躰を云ふな  
りさて奥と邊とにて藻菜の大小あるべきよし講義に云へるはよし

至 氏爾

至はいは氣進み動き附意にて入意たはつらの約聯なり付意るはらりるれと  
活らきて上言の意を總へ助けたる言なりまではまはむらの約聚かり寄意ではつれの約  
聯なり付當る意故れまでとは左迄右迄と其の折其の處其の事物に附當る意なり

御服者明妙照妙和妙荒妙爾稱辭竟奉奉

服はするの約身體に添へ裝ひ總統  
備ふる意明はあかは彼旋にて天つ日の地中に含まりて旋めけるを指して彼旋と云へる



言の赤明などの語となれるあり古史本辭經に委しるはらりるれと活らきて上言の意を  
 總へ括り助けたる言なり妙は絹布の總名にてたはつらの約聯あり面なせる意はた艶あ  
 る意かへはふれの約含まりて平めに體あせる意か平と云ふ言ひはへと通音ふりの約奮  
 動き張含まれる貌を云ふなりさて青にきて白にきてと云ひ帆布といでなご云ふてはた  
 への約なり照はてはつれの約服色の余光の映々と聯あり赫く意るはらりるれと活らき  
 て上言の意を總へ助けたる言あり和にはぬりの約滑やかなる意きはぐりの約旋々  
 と動き寄和らぎ合ひ荒くそばはしからぬ意にごとも云ひてこは凝り寄る意故れにぎ  
 とは衣服にとりては其の織さまの荒く鹿疎あらず細密に凝り寄和らぎ滑らかなる意に  
 て和妙は赤引の糸もて織れるものにて績麻もて織れる倭文の荒妙に對へて和とは云ふ  
 なり此のと古史に委し荒はあはうらの約動き浮顯れ鹿疎にて細密に静り柔なるに對へ

る意らは上言を總へ括り體あせる言故れ和妙を織れる赤引の糸の細く和に引ける麻に  
 對ひて績麻の荒きもて織れるを荒妙とは云ふあり此のとまた古史に委しさてこは和妙  
 荒妙の本義にて後世五色の絹布を奉れば考の説の如く色を以て照明と云ひ織の細き荒  
 きを以ては荒和と云へるあるべく其物品は講義に引ける古書の文の五色の薄絶各五尺  
 ありて云へる類あるべしさて講義に云へる荒和妙の説はおのれはふと信がたくおぼゆ尚  
 よく攷ふべし爾は荒妙和妙に備てと云ふ意さて稱辭竟奉率にて文切れたり  
 御年皇神能前兩白馬白猪白鶏種々色物乎 白はしはすりの約氣進める様に  
 て俗に云ふすつぱりとして灼然く慥なる色の有り狀を云ふろは上言の意を總へ括り體  
 なせる言らとも云ふきはぐりの約上言を旋々と動かし寄せ形容あす意さてくしぎけと  
 活らく言にてけもくれの約同意しはすりの約總へ静り静め形容あす意なり馬の言の意

解けず猪は古史本辭經に世に猪頸と云ふ語ある如く彼の獸の頸の居疎める故に負る名  
 ならむとあり鶏は古説鳴聲を以て名付けたりとあり種はくは旋々と動き寄り集る意さ  
 はすらの約統る意どもは卷首に神主祝部等とある等と同じ  
 備奉氏皇御孫命能宇豆乃幣帛乎稱辭竟奉久登宣 備はそはすらの約揃へ統  
 る意なは成にてぬらの約滑々と動かし寄せ成す意へはふれの約含め寄る意へふと活ら  
 く言なりさて奉久登宣は上に云へる如く奉久迄は神に申す詞宣は宣命の詞を宣意なり  
 つきつぎの文み亦然かり

大御巫能辭竟奉皇神等能前爾白久 巫は神子の意にて子は疑る意疑るは寄に

て父母に寄添子を云ふが本にて御屋津子と君に寄從ふ者をも云へり故れ神子は女を  
 本にて男をも云ひ神に寄從ひ奉仕る意にて御屋津子の意か後世みことも云ふも神子の

略て御子にてはなきか但し御子の義にては神の使ひ給ふ御人の意にて實に神の御子と

云ふ意にはあらぬにやさて大御巫とは講義に云神名式に神祇官の西院に座す御巫等の  
 祭る神二十三座とある此中なるが云々神祇官のは神を齋ひ奉りて他社と異なれば取分  
 て大御巫といふなりとあり辭竟奉は神の御徳を申すにて稱辭と同意なれど講義に稱辭

竟奉は祭にも神の事にも亘りて廣く辭竟奉は神の御上にのみ云ふ事にて狭き詞なり云  
 々大御巫生島の如く祀る御巫に就ては辭竟奉と云ひ座摩御門の如く祭る所に就ては稱  
 辭竟奉と云へりとあり尙委しく云へるを見るべし

神魂高御魂 高御魂を上にあぐべきを下にあげるは講義の説の如き誤か又は詞の

調によるかざるは夜晝婦夫なども云ふを思ふべく高御魂と長語を先に云ふよりは短語  
 を先に云ふかたより上の白久よりかと續くかた通音にてよく續きたは別音なるが故に

開切れてよからずかゝることは素より思ひ構へて云ふにあらねど詞の勢自然と然はなるなり此説いかゞあらん尙よく考ふべしさて此の二神の御名の言意は臆断に云へり

生魂足魂玉留魂

此は伊邪那岐大神の人命を司り給ふ御名あらんと古史に云

へり生はいはうりの約動き活く意にて息の勢なりくはかと通音堅く強き勢にて旋々と動き活らく意がきくけと活らきてみな同意あり魂はむは聚る意すは統る意ひはふりの約含む意さてはひふへと活らきてみも同意なり故れ生魂とは人靈を聚統合寄せ死あんとするを令生意なり魂の言の意は委しく臆断に云へり足はたはつらの約聯なる意るはらりるれと活らきて上言を總べ助けたる言あり故れ足魂とは人靈を聯ね集めて令遊さる意なり玉は魂にてたはつらの約聯なる意まはむらの約聚る意にて聯なり聚かり體なす意留はつは聯ね付る意めはむれの約令聚る意故れ玉留とは魂を聚寄聯ね止め

て令遊さる意なり

大宮乃賣

こは天照大御神の宮の内の事を執り給ひし宇受賣の神の亦。名なり宮

はみは満る意の美稱御の意やは屋にて屋根高く重ね上げたる意にて彌の意あり賣は女にてむれの約物一筋に堅り締らず二筋に班々と亂れ弱き有り状を云にて女陰の形の二つ相因れるより起りて婦人の有状の柔に弱き意なり臆断に委しく云へり

大御膳都神

此は豊宇氣大神なり膳は食にてけはくれの約旋々と動かし寄する意

にて物を寄せ集るを組と云ひ身に寄付るを着又けとも云ふ類にて食は口内腹内に寄せ喰ふ物なれば云ふ宇氣と云ふ宇は動かし寄せ受る意あり都は之に通ふ助辭あり

辞代主登

大國主の神の御子にて天皇命の御守護神なり言の意臆断に云へりさて此

入神は異に重き由縁ありて神祇官に祭らるゝあり

御名者白而辞竟奉者

名はぬらの約滑々と動き寄集り體なせる物に寄成添ふる

ものされば云ふ撫馴など寄觸るゝ意あるを思へ奉者奉る事者云々と見るべし

皇御孫命御世乎手長御世登

世はゆるの約搖き寄意を本にて其の搖き寄合ふ

中間を云ふ故れ世代あごを云ふは天地間又人の身一代間あご天地の上下かたがたに寄對ひ立つ間又人生れてより死に寄付までの間を指して云ふは代と同じさて今の御世と次の手長の御世とは天皇命の所知世間の世と御代の壽とをかねたる趣に間ゆ手長はたはつらの約聯あり満るにて満ちたる意あり長はなはぬらの約滑々と延び續く意かはくらの約旋々と繰組續き寄意にて上言を堅め寄せ躰なせる言なり堅磐はかたいはにてたいの約ちなるがかの音に引かれてさとなれるがかはくらの約旋々と組集り締りて堅く躰なす意さはたいの約轉れるなれども言の儘にてとかばくらの約組集り究り躰なせる

意さて堅と云ふ言はかは右に云ふ如き意たはつらの約聯ありて躰なす意磐はいはの略にていははいはうりの約動きて寄集靜れる意にて磐の有り狀の堅く重く屯を云ふにて入あごのいにて阿行のいか又は氣進む意にてさかしくけはしさを云ふにて出射あごのいにて夜行のいかはふらの約含りて躰なせるを云ふ常磐はとこいはの約ありとこはとはつらの約聯ある意こはくらの約旋々と繰延廻り續く意續と云ふ言は聯々繰旋組寄意あり故れとこは事物聯なり續きて切れ離れず不變意なり

齋比奉

齋比はいみと云ふと同じくいは氣進び厭意ははふらの約奮動かし菝ひ放意

ひはふりの約上言を含み寄せ体あせる言なりはひふへと活らきてみな同意なり故れいはひとは穢惡しきことを菝放棄氣進清くなす意なり

茂御世爾幸閉奉故

茂はいはうりの約氣進み動き寄屯意かはくらの約組集り堅

く強き意故れいかとは物満足りて大きく盛き勢を云ふしは締静体なして上言を助けたる言にてくしきりと活らく言の指し當りて体言とありたるなり上の伊加志穂の處致合すべし幸開はさはずらの約氣進む意さほかと通音堅く強き勢にてくりの約旅々と動く意ははふらの約奮動く意へはふれの約含み寄する意にてへふと活らく言なり故れ幸とは善きことをさうりすうりと悪しく滞るとあく進め動かし奮動かし寄せ與ふる意あり物幸榮ゆるは右の如く氣進めるさま衰ふるは強く氣進ます弱く乱れ滞り静むなり奉が皇睦の處に云へる意にて奉る意を堅く強く限り究めたるてにはなり此の言なくては言勢なし故にゆはいうの約氣進み搖ぎ寄る意るはうれの約動き寄集り渦くまり躰なす意にて居らするをすすむと活らかし云ふるにて居りたる意あり故れゆるとは義理集り寄りて堅く動かの意あり

皇吾睦神漏伎命神漏彌命登

吾はあはうらの約何になれ其の氣の含めるが動

き別れ出体あして顯 在他のものを指して彼と云ふ是あり故れ自のうへを指しても然か云ふなりけりたとへば此之と云ふこと此方のとを云へと彼之の意をも此之と云ふ言有りて自他通ふもつねのとなりがは之に通ふてにはあり扱後釋の説によれば皇祖神あらぬ神等もあれども尊みて皆皇祖神として祭り給ふよしなれば登の言はと爲てと云ふ意又命も尊稱なり又講義の説にては第一の詞の神漏岐命神漏美命以云々を受けたるにて皇天に祖の詔をさすにてとはにてと云はんが如くに依りてと云ふ意なりされば命も詔あり此兩説ともに捨てがたくと畧解に云へるげにさるとにぞありける

皇御孫命能宇豆乃幣帛乎稱辞竟奉久登宣

後釋に奉るは献る意とまた祭る意とある言なれば稱辞を竟へて献ると云ふ義になるなりとあり

祝詞一言攷二之卷

卜部實久著

座摩乃 考に兩説ありて井之後と云ふ所の名か又は井之塘の意にて井の邊にます神

にて御井また御溝水にも祭らるゝならむとありて講義に云々御溝水の神にませり云々  
井之塘即ち溝にて御溝水あること云も更なり云々とあり本書につきて見るべし井はう  
りの約動かし寄圍み境界なす意にて居すわる意あり但し後世こそあれ上古水汲む處を  
總て井と云へば圍みなすには限らねどそれはた其の處と總するて居定れる意なり後は  
しはすりの約統り締り静まれる末の意なりりは上言を總括りて体なせる言なり塘はつ  
れの約つゝみと同意にて聯なり包みて埒なし体なせる意か

御巫乃稱辭竟奉皇神等能前爾白久

生井榮井津長井阿須波婆比支登御名者白氏辭竟奉者

生は生榮ゆる意の美稱言の意既に言へり榮は豊榮登の處に云へる如く咲は榮の本語な  
る故に斯の如くさくと云へり津長は記傳に井の深さは水冷かなる故に釣瓶の綱の長さ  
由を世の長さ由に懸て稱へたるか此の三の名は御井の神の御名を種々に稱へたるあり  
とあり此れに依れば綱長の畧にて綱はつは聯なり續く意あはぬらの約滑々と延ひ續く  
意延と云ふ言のはぬらの約あり綱の言の意委しく臆斷に云へり長は既に云へり阿須波  
は足場にて人の足ふみ立る地を守ります神にて大年神の御子なり婆比支は這入君の意  
にて人家の門より屋内に入るまでの間の庭を守り給ふ神にて出自上に同じ此兩神の御  
名の言の意委しく臆斷に云へり

皇神能敷座

敷はしはすりの約締結り静むる意はくりの約組集め極締る意か

くけと活らきてみな同意なり坐は尊稱既に云へり講義に云敷坐は其任を及ばすの謂あり萬葉に天皇の敷坐國また百敷の大宮所とよみ云々と云へり

下都磐根爾宮柱太知立

右に云ふ皇神の統知ます地の下都云々と續く意なり下

はしは締り静りる意たはつらの約聯なり附意都は之に通ふ助辭磐は既に出根はぬれの

約根は物の寄集れる處あれば其氣の滑々と動き寄集れる意貫ぬく貫ぬるなどのぬと同

意委しくは臆斷に云へり宮は既に出柱はははふらの約含み寄る意しはすりの約統締り

静まる意らは上言の意を總へ括り躰させる言なり故れはしらは物と物との間を支持も

のあれば云ふ委しくは臆斷に云へり太はふは含る意とはつらの約聯なりて強く大きな

る意知は灼然の意既爾高知と同じ立は建立るにてたはつらの約てはつれの約同行重あ

れる言にて聯ね結けて強く慥なる有状を云ふさて宮柱太知とは記傳の説の如く其主の  
其宮を知り坐を稱て廣く大きにと云意を柱にかけて太と云兼て其宮を祝たるものなり  
又講義に皇御孫の命の敷坐る大宮所れど上に云へる如き子細ある故に皇神の敷坐下  
津岩根にと言を易て申させ賜ふとなりとあり

高天原爾千木高知臣

千木はちはつりの約聯あり釣突出でた有り状を云ふ千木

は記傳に云へる如く上代の家造に屋の左右端に在て其本は前後の軒よりして上りて棟  
にて行合ふを組違へて其末を長く上へ出だしたる物なれば云ふなり又氷木とも云ひて  
ひはふりの約含り奮出でたるにて千と同意に落るなりさて記傳に氷木千木共に肱木に  
にて其比知の下を省けると上を省けるとの差のみなれば云々とあれど右の如く一言の  
上にて聞えたり木はまさのをの神の御毛よりありて毛の轉なり毛はくれの約其の氣の

旋々くるくと動き寄体よなす意なり委しくは臆断に云へりさて又記傳に高天原には深くと云む  
とて下津磐根爾といふに對へてたゞ高さことを云ふ古言なり云々高知もたゞ氷木ひきの事  
のみにあらず主の其宮を知り坐すを云ふ高も上の太と同く稱辭あり云々さて氷木は高  
く上る物ある故にうれにて云ひかけて兼て其宮をもほためること全まら宮柱太知と云ふ  
に同じとあるはうへなり

皇御孫命乃瑞能御舍乎仕奉氏

仕奉氏

瑞は美稱みは満る意つは聯あり集る

意水みづと同言にて物満みちみ々たる色の全光の水々しく潤しきを云ふ舍やはあらは在あの轉にて  
あはうらの約物動き寄り集り体なして顯居ある意にてあの一い言に在りの意ありらららり  
るれと活きてこれ又在あの活機にての分わりたるらり古史本辭經に委し上言を總括り体な  
せる言なりさてありと轉言に云ふへへとをけと轉し云へるはりは体言にて細く牽ひり締り

らは初言にて阿あの韻あり太く開けて嚴いく聞きゆるより御舍みささには調あふまましくよけ  
ればあるべし故れつねにはありかと云へりかは處にて寄限より堅く境界なせる意仕はつ  
は付意つかはくらの約旋々くるくと動き寄組付意へはふれの約合あり觸付意へふと活あらら言あり  
故れ仕しとは下たる者の上に従したがひ寄付意にて凡べて下ある者の上の爲ためにすることをば何  
わざにても仕ふと云ふなり又上たるもの下したに命めいずるを使つかと云ふはつかはんつかひつ  
かふと活あらら言にてこれ又上より下に事を寄付よる意にて果は同意に落おるらり斯てこ  
は御舍を造り仕へ奉るを云ふ

天御蔭日御蔭登隱坐氏

考の説の如く天を覆ひ日を覆ふが爲の屋やある謂なりさ

て蔭かげはかはくらの約あけもくれの約旋々くるくと動き寄掛り重かさなり覆ふ意なりさて登のぼの字の下  
に爲なすと云ふ言を加へて心こうべし隱かげはかはくらの約あくもくるの約旋々くるくと動き寄意にて



物に掛り方寄意りはらりるれと活らきて上言の意を總べ助けたる言ありさて隠とは後  
釋の說の如く御殿の蔭に覆はれて其内に坐意にて人に見えじと隠るとにはあらず

四方國乎安國登平久知食須我故 四は物二つ相寄意にて四は二より起りて偶數

なれば云ふか方はむろの約聚かり集り體をす意にて方のふれの約合り體をす意なると  
同じ安はやはいあの約又ゆらの約にて氣進搖ぎ緩振和らぎ合ふ意にて強く荒びわる堅  
く締り迫らぬ意すは物濁り滞り荒び亂れず交々々々氣進清く澄住統締り靜まれる意なり  
優と云ふ言もやは堅からず和らぎて細くやせたる意さはすらの約わろく濁り亂れず  
統り締りて靜に清める有狀を云ふしはしくしきもど活く形容言なり平久はたはつらの  
約聯なり面をす意ひはふりの約合る意らは上言を總べ括り體なせる言なりけはくれの  
約旋々と動き寄堅まり形なす意にてかと同じく有狀を形取る言なりくはくしきげと活

らく言にてくきげは上言の意を旋々と動かし寄せ堅め限り究め形容る意しはすりの約  
上言の意を統締り靜め形容る意にてくきげと同意に落つ知はしろはしると同じくしは  
すりの約統締り靜る意ろは統括り體をせる言にて四方國を總統領領給ふ意ありしると  
云ふ言臆斷に委しく云へりしはすりの約上言の意を交々と續け統締れる言にてさしす  
せと活らきてみる同意なり食須はめはむれの約聚寄する意すは統寄る意にてさしすせ  
と活らきてみる同意あり故れ食須とは身に受寄付る意にて食物をめしと云ふも口内腹  
内に受寄る意あり

皇御孫命能宇豆乃幣帛乎稱辭竟奉久登宣

御門能御巫能稱辭竟奉皇神等能前爾白久 門は金門の説あれどかは限るにて

境界せる意かとはつろの約聯ありて體なす意にて處の意なり

櫛警問門命豐警問門命登御名者白氏辞竟奉者 此は夫の手力男の命の又

の御名にて御門の神なるが御名の義断に云へり

四方能御門爾湯都警村能如塞坐氏 湯都は五百都の五百のよと約れるが轉れ

る也五は思ふ旨ありて解かず百はふろの約合り體あす意にて數分の寄集れる意にても

もと云ふむろの約衆り體なす意と同じ都は之に通ふ助け辭村はむの一言に聚かる意あ

りてらは總べ助け體あせる言あり如はこは疑る意疑るは寄なり 巫の言の意解けるどはつろ

の約聯なり付意故れごごは物に物の寄付にて似寄たる意なりくはくしきげと活く言

にて平久の久と同じ塞はさはすらの約進み動きて寄統る意やは搖ぎの約搖ぎ寄意りは

上言の意を總べ助けたる言にてらりるれと活らく言なり故れさやるとは物寄掛り統り

て支ゆる意ありさてこは御門に神の統り住まして悪き物を入れじと支わます意也

朝者御門開奉夕者御門閉奉氏

朝はあしはあさの轉たはつらの約聯なり集

り體あす意にて夕方の方と同意の助辭なり又思ふにあしたは只あさの延かさの延した

あり開はひはふりの約奮動かす意らは總べ助けたる言きはくりの約上言の意を括り組

寄せ限究たる言にでかきくげと活らきてみな同意なり又旋々と動かす意ならむも知る

べからず夕はゆ搖ぎ寄る意にて夕は一日の寄終時なれば云ふにて夜の寄意なると同じ

ふは一日の時の奮動き經觸來て合る意べはふれの約合り體なす意にて方の意なり閉は

たはつらの約てもつれの約同行の音重なりて戸を聯ね寄せ立る意なりさてたてたつた

つるたつれと活らく言なり

疎夫留物能自下往者下乎守自上往者上乎守夜能守日能守爾守奉故

疎はうは動ぎ遊去り薄くある意とはつらの約聯あり解け散り内を離れて遠く外にあ

る意かゝるとは言の意臆断に委しく云へり。ふは奮動く意にてうとくする有り状を云ふ  
 うとびうとぶうとぶるうとぶれと活らく言なり又うとばんうとびうとぶうとべとも活  
 らくべしさてるは右の如くるれと活らきて例の總べ助けたる言なり故れ疎とは親しみ  
 近か付かず遠退く意より此方に向し親しみ美します彼方に背向きて鹿ぶるわざする  
 意自はよはゆるの約搖ぎ寄繋る意は例の上言を總べ括り体おせる言あり故れ自下往  
 は下を行にて下を行は下方に寄掛るあれば云ふからと云ふ言かはくらの約括られ繋  
 れ組寄掛る意にて此。自と同意ありらは例の上言を總べ括り體なせる言あり往はゆは  
 搖ぎ寄意歩と云ふ言思ふべしかはくらの約旋めき動き寄意にてかきくけと活らく言に  
 てみる同意あり故れ往とは此れより彼れに搖ぎ旋めき寄渡る意なりさてこはつねに  
 守り奉るにて己然る言あれば往は二つともゆけば己然る言によむべきを正馴にゆ

かばと將然言によめるは誤か故あるか守はまはむらの約聚り寄る意もはむらの約  
 同意りは例の上言を總べ助けたる言にてらりるれと活らく言なり故守とは物を動  
 かし散らす寄せ締る意にてこはもの來たるを留め且つ上下の處を統締り司る意  
 なり上はうは動き浮騰れる意へはふれの約含り躰なす意にて方の意なり夜は寄聯され  
 る物の間と云ふ意か又は夕と同じく晝より寄終れる意か日は晝にて夜に對ひ日の光の  
 見ゆる意晝のるは例の上言を總べ括り體なせる言なり

皇御孫命能宇豆乃幣帛乎稱辭竟奉皇神等  
 能前爾白久 生島能御巫能辭竟奉皇神等

申し又生國足國とも稱す云々神名式に神祇官。西院。坐生島。巫。祭神二座云々生島神  
 足島神云々あり生は生榮ゆる意の美稱言の意既に云へり島はしはすの約統り締る

意まはむらの約聚がりて体なき意故島は一所と限りて統り聚がれる意あり

生國足國登御名者白氏辭竟奉者 足はたはつらの約聯なり集る意るはらりる

れと活らきて上言を總べ助けたる言あり

皇神能敷座島能八十島者 敷坐は上文と同じ八十はやは彌十はするの約統り締

る意にて數分を体あせる言なり

谷蟆能狹度極塩沫能留限

谷蟆は史傳に蟾蜍のことのよし記傳に云へれど蟾

蜍は具久と鳴物に非ず青蝦蟇は田沼谷相などに居て常に具久と鳴く物あり師説の如く

鳴聲に依て名けむには是が具久と云べき物あり山田の曾富騰のことを云へるにも田に

居る青蝦蟇ぞ由有てきこゆ然れど靈異わざある物は蟾蜍なり此はなほ熟考すべしとあ

り谷はたはつらの約聯あり寄意にはぬりの約滑々と動き寄集る意貫ぬく連ぬるなどの

ぬ又物の氣を集め寄ざるを煮ると云ひ箇のに庭のになご思ひ渡すべし故に谷とは大か  
た片寄れる物の隈を云へり具久は記傳の説の如く蟾蜍ならば鳴聲に依れる名にはあら

で谷相などを漏るにて狹渡る意ならむ漏はくかんくくけと活く言なり狹は後釋に借

字にて眞渡ありと云へり此説の如くはするの約統り締り体あす意にて眞のむらの約聚

りて体あし堅く動かぬ意と同意又狹き意ならば統り締り迫れる意なりさて彼れが歩行

くさま少の間を經行を狹渡と云ふかされど後釋に此の物はいつくまでも靈しく行通る

物なるよし云へるによれば眞渡ると見る方よきか渡はわはうらの約此れより彼れに動

き寄掛る意輪給など寄集る意なり思ふべしたはつらの約聯なり續き付意るはらりるれ

と活らきて上言の意を總べ助けたる言なり極はきはくらの約旋々と動き寄堅く限りて

含み組たる意ははらりの約含まる意はむりの約聚る意にて極とは至留る處を指す塩

沫はしほのあわの略と説き來たれどそれまでもなくしほあわのあなど轉れるなり  
 はしはすりの約其の分子の統り澁り締りて体なせる意鹽は海水の苦りにて其の味しほ  
 はゆきは澁り締りて堅く強き有り状ありほはふろの約合りて体なせる意あり沫は既に  
 云へり留はとはつろの約同語重なりて強く聯なり付意まはむらの約聚がり寄る意は  
 らりるれと活らきて例の上言の意を總べ助けたる言なり故れといまるとは聯なり聚が  
 り寄附當る意なり限はかはくらの約旋々と動き寄強く堅く含み組たる意きもくりの約  
 上と同じく含み粗究切たる意りはらりるれと活らく言にて例の上言の意を總べ助けた  
 る体言あり故れ限とは至留る處を指すさて文意海陸の事をあげて考に云ふ如く天下の  
 遠き限を譬ふ

狹國者廣久峻國者平久

狹きはせばき意狹の言の意既に云へりきはくりの約

上言の意を括り組寄せ体なす意くしきけと活らきてくしきけはみる同意しはすりの約上  
 言の意を絲締る意なり廣久はひはふりの約奮動き張り孕める意ろは上言の意を總べ括  
 り体なせる言久はくしきけと活らきて狭きのと同じ峻はさはずらの約夔利意かは堅  
 き意しは締り静まれる意故れさかしとは人の心なごに取りて鈍く弱からず夔利く賢き  
 意こゝにては山嶽あごの岩石なごそはだちて夔利く且つ締り迫りて堅く峻岨き國の有  
 有狀を云ふきはくしきけと活らきて狭き廣きなご同じさてこゝの文意狹國は廣く成賜ひ峻  
 國は平久成賜ひて云々依志奉と云ふ意に見るべし講義に狹國者廣久鹽沫能留限より受た  
 り云々鹽沫の彌凝に凝り留りて漸國土の大きく成れりし古説にて當今も彌廣りに廣り  
 居形象を云ふ峻國者平久は谷蟻能狹渡極より受たり大地の凹き所は江海たり凸き所は  
 山嶽なり其凹き所は所謂大海あり湖沫水沫の凝成て狹國も廣くなれるが其凸き所は山

縁にして之れを平にせざれば國の面足らばす云々と云へるはうへなり

鳴能八十嶋墮事無鳴能八十嶋墮事無 墮はおはうらの約動き寄押覆ふ意つは聯あり散寄突附意な

つと活らく言なりはるれと活らきて例の上言の意を總べ助けたる言なり無はまはぬ

らの約事物在在と顯はれず滑く弱く隠れて勢ひ立たざる意さてこは濁り濫り弱りて交

利く進立ざるを不と云ふに通ふ言にて但空なるを云ふにはあらず萬物萬事無始よりま

します天神より出でくれば其の天神の有に歸りて空に歸ると云ふ理は曾てなきとなり

故れ萬物萬事此の處に無きは彼處より寄顯はれざるあり素より無きにあらず又有りし

物の無に成るは轉り隠れたるにて一向に盡きたるにはあらず故れ言語も其理にて素

より空しきを云ふにあらず墮事無久は墮事の起らざる意なり此とかばかり云ひては事

分り難し委しく臆斷に云へるを合せ見るべしくしきけと活らく言にて既でに出でたる

活言なり

皇神等能依奉故皇御孫命能宇豆乃幣帛乎稱辞竟奉登宣

辞別伊勢爾坐天照大神能大前爾白久

考に言に云別けてと云ふのみとあり

別はわはうらの約動かし破る意けはくれの約旋々と振動かし離つ意けくと活らく言な

り又かきくけとも活らく俗に物の離るゝをぐれると云ひ消滅なと云ふ言動かし散らし

離つ意あるを思へ神名は臆斷につきて見るべし

皇神能見霽志坐四方國者

見はむりの約物を見るに眼に色の聚がり寄るを見

るなれば云ふ霽志はははふらの約散々と奮動かし張る意るは上言を總べ助けたる言か

はくらの約旋々と動かす意志はすりの約旋々と進み去らす意とすせと活きてみな同

意なり故れはるかすとは張り顯はれて俗に云ふはつと爲す意なりかの言はるけは

るくなども云ふ同意にて旋々と堅く強く動かすからに物極りて慥に見わ滑く煌めきてはつきらとなる意あるなり

**天能壁立極國能退出限** 壁は限のりの無きにてかはくらの約旋々と動き寄含み

組て堅く体なす意きもくりの約含み組て堅く体なす極たる意なりさて此の言退出に對

へば正訓に如斯よまれたるはうべなりもし考の説の如く天の四方に側ちて壁の如く見

ゆる意ならば壁はかは限る意右と内じくべはふれの約含りて體さす意にて方と同意

あり立は自然立なれと宮柱太知立と言同じ退はそはすろの約にて窄り締り避去意きは

くりの約旋々と動き去る意にて俗に云ふぐれ離るゝ意あり辞別の處致へ合すべしかき

くけと活らきてみな同意なりそけそくそくるそくれとも活らく言あり

**青雲能靄極白雲能墜坐向伏限**

青は既に出雲は組と同じくは云ふまでも

くもはむろの約聚がる意靄はたはつらの約聯なる意なはぬらの約滑々と動き寄集る意

馴撫など觸れ寄意なると既に云へりひはふりの約奮動き含り續く意くは旋々と動き寄

集り体なす意かきくけと活らきてみな同意あり白は白馬とある處に既に云へりさて今

は体に居りたる言なり墜はおはうろの約上より下に動き寄押覆意りはりと活らきて

上言の意を総べ助けたる言なり坐はうりの約動き寄居る意向はむは聚かり寄意かはく

らの約旋々と動き寄付意かきくけと活らく言にてみも同意なりさて今はむきふすと云

ふへきをさては調よからねばかと轉りてふすと一聯の語の如くなりたり伏はふは含り

寄意すは窄り統り付く意さしませと活らきてみな同意なり考に向伏とは遙かに向ひ見

るに際伏である雲の限りを云ふとあり

**青海原者棹柁不于舟艦能至留極**

棹はさすらの約木にまれ竹にまれ長く

打ち延たるは俊々と直に進みて交利く統り締りたる形體なるを云ふかをはうろの約動  
 き寄る意にて折終治り締りて一と筋に尾緒成す形體を云ふか柁は棹と同じく舟を漕ぐ  
 物あればかはくらの約旋々と堅く強く振動かす意ちはつりの約聯々と釣上もし突もし  
 動かす意か又今の世の櫓のさま綱繩して舟に括り附てつかふめり古へも然らばかは堅  
 く括り付けたる意ちは舟より釣りたる意か又序てに云ふ舟を繋ぐ戕河をかして云ふか  
 は括り堅むる意しはすりの約統締り意ならん于はははふるの意含れる水氣を振動かし  
 散らして細く締らざる意さはすらの約水氣を交々と進め動かし去らして細らざる意さ  
 じさせと活らきてみな同意なり不は爲と云ふこと物二たつ進み寄り摺合ひする意なる  
 かすと濁るときは其の反にて物濁り澁り弱りて交利く進み寄成らざる意此のと既にも  
 めらめら云ひ委しくは臆断に云へるを見るべし舟はふはふらふらと浮て奮動く意ねは

ぬれの約滑々と柔和に動く意かなほくさぐさに攻へて臆断に云へるを見るべし艦はふ  
 れの約船の前の奮出で、含り躰させる意か至はいはふりの約動き氣進み寄意にて外に  
 出往意か内に入合る意か定め難したはつらの約聯あり附意るはらりるれと活らきて例  
 の上言の意を總べ助けたる言なり

大海原 爾舟満都都氣氏

海はわはうらの約動き寄掛る意たはつらの約聯なり積

く意故れわたとは遠近彼此掛聯ねたる海の形象を云ふか又古説の如く舟もて人の渡る  
 意と見ても言意は同義に落つめりなほ臆断見るべし満はみはむりの約聚がる意ちはつ  
 りの約聯なり集る意たちつてと活らきてみな同意なりみたせの約みてと云ふべき處の  
 やうなれとさては言狭く迫り終の氏文字にも悪く重なれり下の都々氣氏に括りて令  
 滿意自然さゆ故れ正訓にかくよめるぞよき都々は聯ある意論なく氣はくれの約旋々



と動かし寄する意けくと活らく言あり又かきくけとも活らく言なりついは自然に

自陸往道者荷緒縛堅氏 陸は國處にて海に對へり處をがと云ふ意はくらの約組

集り一所と堅く礎に体なせる意かり道はみはむりの約聚がり満る意の美稱ちはつりの

約聯なりて体なす意荷はぬりの約滑々と動かし寄意にて物の氣を寄集むるを煮と云ふ

言又國のになご思ひ渡すべし故れ荷とは人馬に寄せ持たする物なれば云ふ乗ると云言

ものはぬろの約ぬろぬろと動かし寄せ充る意なり則ち荷前とも云へり緒はうろの約動

き寄集る意にて寄せ治終て小成細く雄なす強く堅く締たる體を云ふ結はゆは揺かし

寄る意ひはふりの約奮動かし寄せ含むる意はひふへと活らきてみな同意なり堅はかた

は既に云へり堅めはむれの約聚寄る意めむと活らく言なりさて考に諸國より今年の

初物を奉るを荷前と云ひて篋に納め荒薦に包み緒して馬にのせ駄るを云ふなり云々と

あり

磐根木根履左久彌氏

岩根木根はたゞ岩木と見るべし根に意なし履はふは足を奮

動かし土に觸るゝ意みはむりの約聚寄るにて土に寄付意まみめと括らきてみな同意

なり佐久彌は佐はすらの約進み動き摺行く有状にて変利き岩根木根の凸凹級あせるう

へを行く有状なり級の約さくみは旋々と動き曲る有状みはむりの約岩木のうへに聚

がり寄付くあり状かれ佐久彌は俗に云ふしやくみあり

馬瓜至留限長道無間久立都都氣氏

爪は手足の端なればつは續き付終たる

意めはむれの約聚がり寄体なせる意道はみちの本語間はひは合ひと云ふに同じくふり

の約含り体あを意にて方に通へりまはむらの約聚がれるが斑々と散り動き片寄りて中

空しくなれる意にて物の中をまよと云ふさてひも上の如く解きたれど含まれるが奮動さ

片寄れる中を云意にても有るべしされば同意二た言重なるものなり立はたてと云ふべきに似たれど下の都々氣氏に括りて令<sub>レ</sub>立意自然きこの上の満都々氣氏に同じさて考に云ふことを暫く云ひ切て次の荷前へ續けり史傳に云道の長手の間無きはかり買物の荷馬の立ち續くを云へり

狹國者廣久峻國者平久遠國者八十綱打掛氏引寄如事

遠はどはつろの約とろとろと聯あり解け散内を離れ外になれる意ははふろの約奮動き去りて含り体なせる意にて方と通へりきはくしきけと活らく言にて既に出でたる言なり綱はつは聯なる意はぬらの約滑々と動かし寄せ体なせる意にて繩のなと同じく手してなひ備へたる意打はうは動かす意はつりの約附突意たちつてと活らきてみな同意也掛はかはくらの約けもくれの約旋々と動かし寄る意かけかくと活らく言あり引は

ひはふりの約奮動かき意きはくりの約旋々と動かし寄る意かきくけと活らきてみな同意なり寄はよはゆるの約搖かき意すは統付くる意よせよすと活らきてせますれの約同意なりよさんよしよすよせよとも活らきて同意なりよしはよしの延なりはるれと活らきて上言の意を總べ助けたる言あり

皇太御神能寄奉波荷前者

荷はにの轉にぞと云ひては二の言細くのと云へ

は喉に響きて強く太くさきに續きて調よければあり前ははすらの約進み出づる意はくりの約組集り極りて体なせる意にて先の意ありさて荷緒の處攻へ合すべし

皇太御神能大前爾如横山打積置氏

横はよはゆるの約搖き曲る意は凝る

にて凝るは寄る意にて曲り寄りたる體を云ふ山はやは彌まはむらの約聚かり圓かれたる山の形象を云ふ打は言の意上に云へりさて上あるもこゝあるも發語なり積はつは聯

あり集り付意みはむりの約聚かり寄る意まみむと活らきてみる同意あり  
残平聞看 残はのはぬろの約滑々と動き除く意こはくろの約旋々と動き去

り細少に成りたる意りはらりるれと活らきて上言の意を總べ助けたる言のさしあたり  
に體となりたるなり

又皇御孫命御世乎手長御世登堅磐爾常磐爾齋比奉茂御世爾幸閉奉故  
又はまはむらの約聚かり寄意たはつらの約聯なる意にてまたとは上言に重ね寄せ聯ぬ  
る意の一體言あり

皇吾睦神漏伎神漏彌命登 史傳に云ふ神漏岐命は高皇產靈神を申し神漏彌命

は神皇產靈神を申す御稱あるを此に大御神一柱をかく稱せることは上件の御幸ます故  
に別にかく尊み稱へ奉る由なり云々故命登と云るありこの登は神漏岐命神漏美命と稱

奉てと云ふ意の登なり又講義には皇大神及天社國社の神等を如此齋き奉らせ給ふ御事  
は皇祖天神の詔命に因准たまふものなりされば此は大凡に皇祖天神の詔命に依せ給ふ  
御事と神にも顯はし申せるにて此の登の詞はるれに就て云へりとあり略解に並べ載せ  
たりなほ大巫祭神の下致へ合すべし

宇事物頸根衝拔氏 宇は鵜なれと言の意解けず事はすりの約統り締りて體に體

あす言にて助辭に似て助辭に非ず鵜ある物といふ意になるなり馬自物男自物など例多  
し頸は身體の根元あればうは其の氣の動き寄集れる意なはぬらの約滑々と動き寄成れ  
る頸の体をいふさてうあねとは頭上を指せり衝はつは聯ある意さはくろの約旋々と動  
かし寄當る意かきくけと活らきてみな同意なり扱はぬは滑々と動かし除く意除くとい  
ふ言のはぬろの約なりさはくろの約旋々と動かす意にて俗に云ふぐれて離れ合る意あり

りかきくけと活らきみな同意ありこの衝拔は地にまれ何にまれ下方に衝徹るべく頭を伏るを云ひて衝徹は實滿たる物を散し除きて空穴あらしむるいひなりさて鶴事物は鶴の水に潜入を人の頭伏に譬へたるなり

皇御孫命能宇豆乃幣帛乎稱辞竟奉久宣御縣爾坐皇神等前爾曰久

縣は上り田にて元は畠のことあり田と云は田をも畠をも統たる名にて其中に水のつかにを畠とも上田とも云ふ水田よりは高く上りたる田なりとある記傳の説によれば上はあはうらの約動き浮登り躰あす意かはくらの約これも旋々と動登り体なせる意なり田は既に云へり又御縣は朝廷の御料にて供御に備る雜菓雜菜を貢る地を云へり内膳式に園池と云る是なり阿賀多は願田の義なるべし方疆を限りて願ち知る意にて名けたるなり云々田とは陸田をも水田をも統たる名なるが阿賀多と云ふ時は一方域の總稱となれ

り倭國六の御縣は記傳の説の如く此は殊に近く京畿にて朝廷のめし給ふ陸田物を作りて奉れども此に准て餘國の縣をも然なりと云はむは僻説なるべしと云ふ講義の説に依れば願はあはわと通ひてうらの約動かし分る意亂れ散分を荒と云ふ思ふべしかはくらの約旋々と動かして俗に云ふぐれ離れ令るなり穿のが文字もこの意なりちはつりの約聯ね散らす意又上言の意を聯ね寄せ締たる意にもあらんかたちつてと活らきてみも同意なりさて此縣のことを略解に兩説を委しく引ていづれも捨がたきよし云へり己は記傳の説に心引かる

高市葛木十市志貴山邊曾布登御名者白氏此六御縣爾生出

略解に考云此神たちの御名は別にあれど一はたゞその社の坐す所を御名といひさせり云々山城の京となりては内膳式の十所の御園を定め各其御園の神十四座をも祭り坐

せどきは古に依て大和の六の縣は月次新嘗の祭を絶させ給はざるなりとあり六はむ  
は聚かる意偶數なれば云ふかつは聯あり集り体なす意にて箇の意廿箇などちとも云へ  
りちもつりの約同意なり生はぬらの約其の氣の滑々と動き寄体成す意りはらりる  
れと活らきて上言の意を總べ助けたる言なり出はいはうりの約動き氣進む意つは聯を  
りてつと勢ふ有り狀いでいづと活らきてでもつれの約同意ありるはるれと活らく言に  
て例の總べ助けたる言なり

甘菜辛菜乎持參來氏皇御孫命能長御膳能遠御膳登聞食故

持は以と同じ參はまはむらの約斑々と動き進む意向と云ふ言思ひ渡すべし退は動き去  
るなり物の皮を除くを俗にむくと云ふ思ひ渡すべしぬはうりの約動く意なるが居靜る  
語なれば上たる人の方へ敬ひて靜に動き行く意なりさて入のいはうりの約内に動き付

くにて阿行のい出のいはうりの約外に動き進むにて矢行のいあるがこれらのいと同じ  
く氣の勢ながらわ行の稚聲にて軽く弱く靜なるなり來はくりの約旋々と動き寄意にて  
大かた彼れより此れに寄をも云へど又此より彼れに行き寄をも云へりさてこきくと活  
らきたまたまはけとも云ひてみな同意なり長遠御膳は既に云へり聞はききの延びたる  
にて言の意は既に云へる如くなるが食賜ふを云へる意は物の音を聞くは耳に慥に受入  
るなれば物を喰も口内に受入るにて同義に落るありつねに眼に色を受るを見ると云ふ  
を眼におづからぬ心に思はれるをも見ゆと云へり思ひ渡すべしさて此の言上の祝詞に  
云ふべきを洩したればこゝに云ふ

皇御孫命能宇豆乃幣帛乎稱辭竟奉久宣

山口坐皇神等能前爾白久飛鳥石村忍坂長谷畝火耳無登御名者白氏

講義に云此の詞は宮室を作る料の宮材を伐るの用に就きて山神を祭らせ給なるを其御祭は山口にて行はせたまふことなるが故に其御社は山口にして齋祀らせたまへり云々今の京となりては山城國にこそ山口神社を定めさせ給ひて齋かせたまふべきに尙大和國にて祀らせ賜ふ事は上に云へる如く神代の幽契を重みし給ふ所あり云々とあり口はくは旋りと動き寄含める意ちはつりの約聯あり形なせる意なり

遠山近山爾生長留大木小木乎本末打切氏持參來氏 近はちはつりの約聯あり續ける意かはくらの約旋々と動き寄組堅く形なせる言なりかれちかとは彼方に遠く離れ此方に聯あり續ける意なり立留はたち有の約たたるの轉ありこは調によれり此説はどかく云ふ人あるべけれごおのれ別に論あり小はうたの約動き寄雄々しく強く締り緒は寄締り細密になりたる意あり本はもはむろの約聚かり寄意とはつろの約聯あり

寄意本は末より聚かり聯なり集る所あれば云ふ末はすは拵り統れる意るはうれの約動き寄渦くまり居りて体おせる意なり故れ居ら合ることをすすうと活らかし云へり切はきはくりの約かきくけこの五音堅く強き意あれは旋々と強く動かし除消意物の亂れ破るゝを俗にぐれると云ふ屑あごも旋亂れて細少になりたる意なりればらりるれと活らさて上言の意を總べ助けたる言なり

皇御孫命能瑞能御舍仕奉天御蔭日御蔭登隱坐氏四方國平安國登平久知食我故皇御孫命能宇豆乃幣帛乎稱辞竟奉久宣水分坐皇神等能前爾白久吉野宇陀都祁葛木登御名者白氏辞竟奉者

史傳に云水分神の坐す所を即ち水分といふなりと云へり吉野云々は和國にて水分神を祭れる所々なり水は既に云へり分はくはくろの約旋々と動かし寄る意あるががきく

けこの五音堅く究る意あれば究寄充る意まはむらの約聚寄せあつる意なり又ばとも云ひてばはふをの約合め寄る意にて同意に落つりはらりるれと活らきて上言の意を總べ助けたる言あり故れくまるとは數を究め量り寄充る意なり

皇神等能寄志奉牟與都御年乎八束穗能伊加志穗爾寄志奉者皇神等爾初穗波穎母汁母穗閉高知懸腹滿雙氏稱辭竟奉登

穎母汁母汁のこのみ長く強くて穎に言なく掛け合す講義の説も取りがたし穎と汁の

交意よく徹りてきこゆるは祈年の詞なり後釋に云へることあり見るべし

遺波皇御孫命能朝御食夕御食能加牟加比爾 加牟加比は後釋の説の如く食

向にて御膳につき給ふを云ふなり加は食の轉れるにて食の言の意既に云へり向はむか

はむくと云ふ言の意既に云へりひはよりの約合にて合は寄なりはひふへと活らきてみ

な同意ありむかへむかふむとふるむかふれとも活らくこは令向なり  
長御食能遠御食登赤丹穗爾聞食故 赤は明妙の處致へ見るべし丹はぬりの

約滑らかある意にて赤土を云ふ本は黄土をばにと云へるがはの言の省りたるにてにと

云へば赤土のことなれるなり委く臆斷に云へり穗はふらの約奮動き顯はれ含まり体

あす意にて赤土の色の餘光を云ふさてこは考の説の如く御孫命の御病なく大御顔の赤

さを赤土にたとへたるにて赤丹穗の如く爾と云ふ意あり講義に異説あり見るべし

皇御孫命能宇豆乃幣帛乎稱辭竟奉久諸聞食登宣

諸聞食登宣は講義にて第一詞に集侍神主祝部等諸聞食登宣とある結びあり云々

辭別 講義に云此は上に擧たる諸祝詞に皇御孫命能宇豆能幣帛乎稱辭竟奉とある其幣

帛を取煩つ毎に宣る詞なり云々中臣進て云々と見わて右の詞どもは幣帛を煩たるよ

り先に中臣此を宣るが其後にあること故に辭別と云て其境を分てり云々此辭分はその幣帛の度に宣るあり云々

忌部能

記傳に忌部とは神を奠祭る種々の物を作り又然らでも凡て齋潔清在て事をなす職をいふ名なりと云へり忌部氏の祖太玉命よりぞ起れる忌はいはりの約動き氣進む勢みはむりの約氣進びて穢惡を斑々と散らし去る意物の皮を除け散らす俗にむくと云ふ思ふべしまみむめと活らさてみな同意なり故れいむとは氣進びて穢惡を遮去氣進清くする意あり又思ふにいの一言に氣進清くする意は有りてみの言は聚かり寄締る意にて氣慎ひ意か部はふれの約含み集る意にて群たる意なり

弱肩爾

後釋に肩はつがひ目にて折れ屈む所なる故に弱とは云ふありとあり弱はよはゆるの約揺く意わはうらの約動き亂るゝ意物のそゝくるをわゝくと云ひ猥りがは

しきとする人を俗にわやく者あど云ひ分も動き分るゝ意なり故れよわとは揺ぎ動き亂れ堅く締らざる意なり肩はかはくらの約本體に組掛りたる意たはつらの約聯される意あり

太多須支取掛氏

太は美稱多須支は禰にてたはつらの約聯ね付る意須は統る意支はくりの約括り掛る意さてたすかんとたすきたすけと活らさてみな同意あり取はどはつらの約物を物に聯ね付る意手に取る手に聯ね付るありはらりるれと活らさて上言の意を總へ助けたる言ありさて又考に云忌部は神事の時手行ある故に禰をかくめり御膳に仕奉る男女の禰領巾を掛るが如し

持由波麻利

考云持はその幣帛を取まかなふより云ふべしと云ふ由はいの約氣進みて穢惡を揺かし散らす意麻はむらの約これ又穢惡を斑々と散らし去る意波はふら



の約これ又穢惡を奮動かし去る意利はらりるれと活らきて上言の意を總へ助けたる言  
なりさて右の如く解きくれど又思ふに麻は聚かり寄締る意にて穢惡を去り慎む意か上  
の忌と致へ合すべし。みとまど通音ありかれば波も含み寄締る意にて慎む意か。は尙  
ほよく致ふべし。

仕奉留幣帛乎神主祝部等受賜氏

奉留留の留は有の活機にてらりるれと活ら

きて上言を總へ助けたる言なり上のれも有の活機にて總へ助くる意ながら上は一聯の  
語あれば別にして云へるあり受はうは動かし寄る意はくれの約旋々と動かし寄る意  
括り組付含む意なりさてげくと活らく言なり賜はたまはは既に云へる意ながら自己に  
受け寄せ付くる意りはらりるれと活らきて例の上言の意を總へ助けたる言なり

事不過捧持奉登宣

過はあはうらの約動き亂るゝ意やはゆらの約搖ぎ亂るゝ意

まはむらの約班々と亂るゝ意たはつらの約聯ありたるが散々と亂るゝ意つとちとちと  
つてと活らきてみな同意あり故れあやまつとは事物正直に善く締れるが悪く曲り亂れ  
動く意にて悪くよからぬとの交るを俗にあやのあると云ひて禍とあやと通ひ似寄るを  
あやかると云ふ寄は動くにて亂るゝと通へり血を出すをあやすと云ふも同意なり尙臆  
斷に記傳の説を引きて云へるとあり致へ合すべし捧は差上の約差はさはすらの約事物  
を進み寄て俊利く慥にあつる意しはすりの約これ又寄締り慥にあつる意さてはんんん  
しんんんとせ活らきてみな同意なり上はあはうらの約動き浮登り寄る意はくれの約  
旋々と動き登り寄る意げくと活らく言なり

祝詞一言攷三之卷

卜部 實久著

春日祭

鹿住所の義てふ史傳の説に寄れば鹿はかぐの畧にて火神加具土神の御末

なる故に云ふにてかは旋の約くも旋の約同意にて火の旋々と炫く意住はすみの畧氣進

み寄統り居る意所はくらの約物旋々と動き寄組集りて一と所と堅く體あす意

天皇我大命爾坐世

天皇すめは皇御孫に同じらは上言の意を総べ助けたる言な

り大命爾坐世詔詞解に云く坐は借字にて令隨の意ならむか令隨とはもと麻とのみい

ふが即ち隨の意にてそれより麻々爾とも麻爾麻爾とも麻加世ともいふあるべしさて大

命爾令隨とはまづ萬葉の歌につねに天皇の命かしてみとよめるは天皇の大命はいか

なることにても背きがたく其命のまにまに畏らりて仕奉るよしにてるれば臣民の方よ

りの言あるを此の大命にませはるを天皇の方よりいへる詞にて天皇は天の下の萬の

事を大命に隨に令爲玉ふよし命に任せといふと同意なりされば神ながらと申すたぐ

ひにて天下萬の事大命のまなる天皇と申す意にて此詞やがて天皇の御事となれるに

て云々と云へりこはたゞ天皇の御事とのみ見ては聞えず天皇の大御言に任せ皇神等

能廣前仁白久と云ふ意に見るべしまはむらの約聚がり寄る意せはすれの約せすと活ら

さて令の字の意にてしめしむと云ふと同じく統締迫寄る意なり隨の字の意は寄した

がふなり思ふべし故れませとは物に物を寄せ締付けて儘に負持たする意なり

恐岐かは堅き意しは締る意こは凝る意にて貴きものは見るに心おそれて堅く締り凝

り小さくある意なり岐はくしとびと活らく言にて既に云へることなりさてこは次の神

等に掛る言なり

鹿嶋坐健御賀豆知命香取坐伊波比主命牧岡坐天之子八根命比賣神

鹿の言の意も島の言の意も既に云へり健御賀豆知云々の神名は臆断に云へり又地名は

大かたいはず比賣神は説々ありて何神とも定らず比は靈の美稱賣は女にてむれの約二

たつの物聚々と相寄る形にて一と筋に締れる物の強さに對ひて柔に亂れたる意にて女

陰の形より起りて女の稱となれり靈の言の意も女の言の意も臆断に委しく云へり

四柱能皇神等能廣前爾白久 四柱の四も柱も言の意既に云へりさて神を數へて

幾柱と云ふ故は男莖なす牙より起りて牙則ち神にて一柱と云ふも一神と申すも同じ義

にて孰れも美たる言にて柱は物の成整ひ鎮まりたるを云ふ言にていかにも然るべき稱

辭あるよし史傳に云へり牙神同義に落る故よし又柱てふもの、故よし委しくいはれた

るを見るべし今は其概略を云ふあり廣前は大前に同じさて廣は上の狹國者廣久の處に  
云へり今は久の言なくて體言あり

大神等能乞賜能任爾 乞はこひの延びたる活言の差當りて體言となりたるありこ

はくろの約旋々と動き凝寄意ひはふりの約含むにてこれも寄意はひふへと活らきてみ

な同意あり故れこふとは何にても求め寄る意賜比はたまはんだまびたまふたまへと活

らく言の差當りて體言となりて能に續けり任爾はまはむらの約聚がり寄意にはぬりの

約滑々と動き寄意にて二言重なりて何事にまれ寄從ふ意にて隨の字の意なり今は大

神等の乞賜ふ御意に寄從ふ意なり大命爾坐世の如くも一言にても云ひまを重ねてま

とも云ひ又まにまにまにひとつ加へても云ふには右に云ふ如き意にてまも同意を重ね

たる言なり今の如き任の下に爾文字を加へあどすればてにをばの如くもおもはるれど

更に然にはあらずよく致へ渡すべし

春日能三笠山能下津石根爾宮柱廣知立

廣は考の説の如く太とは事により

て意通へど柱に廣しといふ言なきを講義の説の如く今京となりてかゝることも出でこ  
しなり

高天原爾千木高知天乃御蔭日乃御蔭止定奉氏

定はさはすらの約進め寄

せ統緒る意だはつらの約聯ぬる意めはむれの約めむと活らさて聚寄る意故れさだむと  
は統聯ね寄緒る意なり

貢流神寶者御鏡御横刀御弓御梓御馬爾備奉理

寶はたは足る意かは重な

る意らは例の上言の意を總へ括り體なせる言にて滿て大なる意の美稱にて俗に大切な  
る物など云ふ意味にや百性は大祓執中抄に田族の義にて族をからと云ふ言うからやか

らなご云へりとなりこは空にたばえたるまゝありなほ本書しらへ見るべしこの百性と  
寶とひとつには見がたく右の愚説はふと思ひよれるあり又或説に百性を田地の高何石  
など云ふ高てふ言より出でたるにやと云へりたからと云言貴人のうへにも云ふ言ある  
を思ふにたはつらの約聯なる意足ることかは重なる意にて右と同意なるが滿て大きな  
美稱にはあらず聯なり集り部なす意にて高貴の上にとりては其御系の部なし賜へる意  
下賤のうへにとりても又其部す意にて上下にわたり其。一系其。一部をさす意味にも  
やあらんこはふと思ひ寄まを云ふなりあほ先哲今人の説なども見聞き糺して定む  
べし鏡は炫見あるよし記傳に見ゆ炫はかはくらの約旋やと光り動く意見はむりの約眼  
に物の色を聚寄る意既にも云へり横刀ははの延にてははらの約奮動かし觸れ寄す  
る意はくらの約旋やと動かし寄る意括る組むの如く思ふべしはかきくげと活ら

きてみな同意にて活言の差當りて体言とありたるなりかれはかしては身に觸寄せ着る  
意なり弓は取の延にて活言の差當りて躰言となりたるあり弓は手に取るものなれば云  
ふ取の言の意既に云へり梓はほはふろの約奮動さめらはし合る体あす穂まごと同意に  
て其のいまはひを云ふかこは疑るにて物凝り集れば体なすものあれば其体を云ふか委  
しくは臆断に云へり

御服波明多閉照多閉和多閉荒多閉爾仕奉氏四方國能献御調能荷前

取立氏 献禮留の留の言前文仕奉禮留と同じ調は記傳に都岐は都具を体言に爲たる

にて御供給ありさては俗言に人に物を看給と云ふ都具と同意にて都具は續くる意あれ  
ば御調と云ふは公に用ひ給ふ諸物を下より供給奉る意の名なりとありつは聯ね付る意  
さなくりの約旋々と動かし寄る意括る組なごの意なりさてつがんつぎつぐつげと活ら

さてみま同意なり

青海原乃物者波多能廣物波多能狹物與藻菜邊藻菜山野物者甘菜辛  
菜爾至御酒者饗上高知饗腹滿立氏雜物乎如横山積置氏 酒は酒をくし

と云ふくしの約には藥と同意くしはくは旋々と動かし寄る意しはすりの約摺意故れく  
しとは身に摺寄せ付くる意にて藥は貼藥が本なるに酒は藥と同物あれば云ふなり委し  
くは臆断に云へり

神主爾某官位姓名乎定氏

某はそはすろの約進み統り寄る意れは上言の意を總

へ括り体あせる言なり故れそれてふ言は此に對ひて物にまれ事にまれ彼方なるを此方  
より進み統り寄て其の物其の事と儘に指定め形容意なり官はつは聯ぬる意かばくらの約  
堅く括り組意はすらの約統定むる意故れ官をつかかると云ふは萬機を統る意つかひ

る。と活らかしても云へり野の高きところを野づか。と云ふ高き處は物統集れる處され  
 ば云ふなり位はくらは千座の置座などと同じくは旋々と動き寄含み組て体あす意ら  
 は上言の意を總へ助けたる言のは居定り体あす意さて千座の置座などは物を置臺を云  
 ふにて金木を括り組て体なせる意又金木ならぬ臺と云はんも組立てて臺とあせる意は  
 動かす藏は組立て、物を含籠置く處なり思ひ渡すべし  
 抑も位は高下の品を定め其人に合寄せ宛る意なり姓名はなはぬらの約にはすりの約同  
 意重なりて滑々と動かし寄る意にて事物を寄せ當指を意名汝など同意ありかれまにと  
 は何の字をめて、廣く事物を指し或は指當て疑ふ意にも云ふなりがはくらの約含み寄  
 せ堅く体あす意しはすりの約統締りて慥に体なす意をももまにがしとは物にまれ事  
 にまれ堅く慥に体なせるを其と寄せ當て指を意なりさて今姓名とあるは誰にまれ官人

を神主に定むるなれば其官人の姓名をさす意にて正訓に如此讀れたるによりまにがし  
 てふ言の意にはやくあさ言なれどもついでにとき試みたるになむ

獻流宇豆乃大幣帛乎安幣帛乃足幣帛登 考に云安とは事故あきをいふ足は關

落ること無きなりと云へり安も足も既に出でたる言なり但し足はたらたりたるたれと

活らく言の差し當りて体言とありたるなり

平久安久聞食者登皇大御神等乎稱辭竟奉久白 安久はやすの言の意既に云

へりさてらは上言の意を總へ括りたる言なりけくは平久に同じ

如此仕奉爾依依今母去前母 如此はかはくらの約旋々と動き寄集り堅く体あま

意くは組合て体なす意にて物にまれ事にまれ 現在形を堅く強く定め差意これこのな

と云ふこも 是は總へ助けたる言のは下につくくらの約組集り凝りて堅く体なせるをさす意  
 てにはなりかれ此處も一言に云ふ

にて同意あり如此とあらばと云ふ意の言をことならば云々と云へる古哥あり思ひ渡す  
 へしさて今は祭典を仕へ奉る現在の有、状を云へり依はよはいお又ゆるの約にて氣進  
 み搖ぎ付く意りはらりるれと活らさて上言を總へ助けたる言なり故れよりとは上言を  
 氣進め搖かし續けて慥に差し定むる意味なり今はいは氣進み寄當る意まはむらの約聚  
 がり寄當る意故れいまとは氣進み寄聚かり寄當る意にて苛ちたる勢にて物にまれ事  
 にまれ差當れる体言なり故れ即時をいまと云ひ直に云々と云ふ事を今行今歸るなど云  
 ふは苛ち氣進み當たる意なりさればまはむらの約まがら斑々と散動く意にてもあらん  
 か去はゆは搖ぎ動く意くは旋めき動く意にてかきくけと活らさてみも同意なり故れゆ  
 くとは搖ぎ旋めき經渡る有、状を云ふ前は行く主を先とさしたるにて言の意は既に云  
 へり荷前の  
 こところ

天皇我朝廷乎平久安久 朝廷はみは御かとは門の意にて門の旨の意御家と云と同意  
既に云へり

天皇を尊みてそれとさしあてず申す稱なり

足御世乃茂御世爾齋奉利 足はたりの延言なり茂は既に出づ畧解に今按に講義

に足御世茂御世につと委しき説ありて足は皇威の遍く天下に光宅す義茂は動き無き義

とせり云々とあり

常磐爾堅磐爾福閉奉利 前文堅磐を先とせる方調よし今の京とありての言と見

えたりさるはかは極 初言にてあの開音の韻あり大きく堅く強くて上冠らするによく

とは立終言にてあの韻もなく言少さく窄りてよろしからず又かさと云へば前文齋奉利

より續くに利のいのひびきよりさのいのひびきにつづくに無縁のをへだてずと同

行のかをへだつるにて調よし哥にまれ文にまれ調のよきとあしきはかゝる微理により

ことなりさて又中古の哥に常磐堅磐と續けたる多しそは上窄く下太き方其の歌のおも  
 むきによりて調よければなりさて此のこと既に先哲のさだありしことなるが調による  
 故よし委しくいはれざりしを愚説を交へてかくは云ふにあんあまり委しくつたささと  
 と云ふ人あらめどふと思ふまゝを云ふになん  
 預而仕奉流處處家々王等卿等乎平久 預はわはうらの約動き寄集り當る意  
 つは聯なり付意かはくらの約旋々と動き寄含み堅く當る意りはらりるれと活らさて上  
 言の意を總べ助けたる言なり故れ 預とは事物に寄當る意にて俗に物を受け置くをわ  
 つかると云ふも我方に受け寄せ置く意なりさて今は御政事に掛り寄る意にて考の説の  
 如く諸の司々百官に係れる語あり處はといつろの約聯あり集り儘に強く体あす意こは  
 くの約含まりて堅く儘に体あす意 堅き意ある前に云へり ろは上言を總べ括り体なせる

言なり家はいはうりの約動き寄屯意でへはふれの約含りて形あす意にて方あどの意な  
 り王は大君にて大は美稱言の意既に云へり君はきはくらの約かきくけこの五音堅き  
 意ある故に物組合みて堅く体なしてきと儘にある意みはむりの約聚りて体あす意にて  
 身の意なり故れきみとは上を本にて下たる者をも儘にそれと定めてきと指を意 卿は  
 天皇の御前に侍ふ者の意前の言の意は既に云へりつは之に通ふ助辭ありこれ又既に出  
 づ

天皇我朝廷爾伊加志夜久波叡能如久仕奉利佐加叡志米賜登稱辭竟奉  
 登白大原野牧岡等 伊加志夜久波叡は考に伊加志は既に出でたり夜久波叡は彌木榮  
 を略き轉して云ふ言なり云々王卿百司の人等までも彌榮に榮えしめ給ふと云ふ譬なり  
 とあるが如し彌はいはうりの約動き氣進み寄屯意やはゆらの約搖ぎ寄重ある意木はさ



の轉きの言の意既に云へり榮はははふらの約奮動きて合まる形なす意えはえゆと活ら  
く言の体言になりたるにてゆれの約搖ぎ動きて寄集り形なす意故ればえとは草木の氣  
の奮動き搖ぎ寄集り形なして出で顯はるゝ意にて草木のさかゆるなれば玉卿百司の人  
のさかゆる壁によくあたれりいやがうへに木の生榮ゆるをばやしといふ又はえとの  
みもいふなり林はは上と同じくやもゆらの約上と同じくしはまりの約進み動かし締り  
て慥ある形なす意にてさしませと活らきてみる同意にて林と云ふときは躰言まりさて  
又物の色の指合を映と云ふ言今と同じ活言にて物の色の奮動き觸搖ぎ寄合ふ意なり佐  
加叙は佐加てふ言の意前文朝日能豊逆登の處に云へり致へ合すべし叙はゆれの約えゆ  
と活らく言にて搖ぎ動く意でいうより成れるや行の言なる故に氣進みて勢よく生活  
く有、狀なりなほ佐加てふ言の活らく有、狀前文に云へり致へ合すべし志米は志はす

りの約統締る意米はむれの約聚寄る意にて今はさかゆる事を寄せ統締る意にて令の字  
の意ありさてしめしむと活らく言なり牧岡等の等はさには何にて物を寄せ差す意何の  
言の意既に委しく云へり致へ合すべしとはづろの約聯なりて共なす意なり故れまにと  
は物を空にはかりて何共と寄せ差意にて後世と云ふ言の此のなにとのにとの約り  
濁れるあり二言聯なり約りては濁る故えよし漢字三音考に委し正訓になにとのとを  
濁れるはいかなる故にやさて又思ふになにとのとは共の意にはあらで聯なり集り体な  
して何の意を利く強く差す意にてにはのとならむかあとのとも同じこは尙ほよく致ふ  
べし

祝詞一言致三之卷終

97  
510

版權所有

明治四十年十一月十九日印刷  
明治四十年十一月廿五日出版

定價金貳拾錢

著者  
發行所

京都市上京區御前通東口入  
一條通新建町十一番地

上園實久

發行所

京都市麴町區飯田町五丁目八番地  
皇典請究所內

水穗會

印刷者

京都市小石川區小日向臺町  
三丁目四十三番地

佐伯外美雄

印刷所

京都市小石川區小日向臺町  
三丁目四十三番地

大日本慈善協會活版部

現款

現款

現款

現款

現款

現款

現款

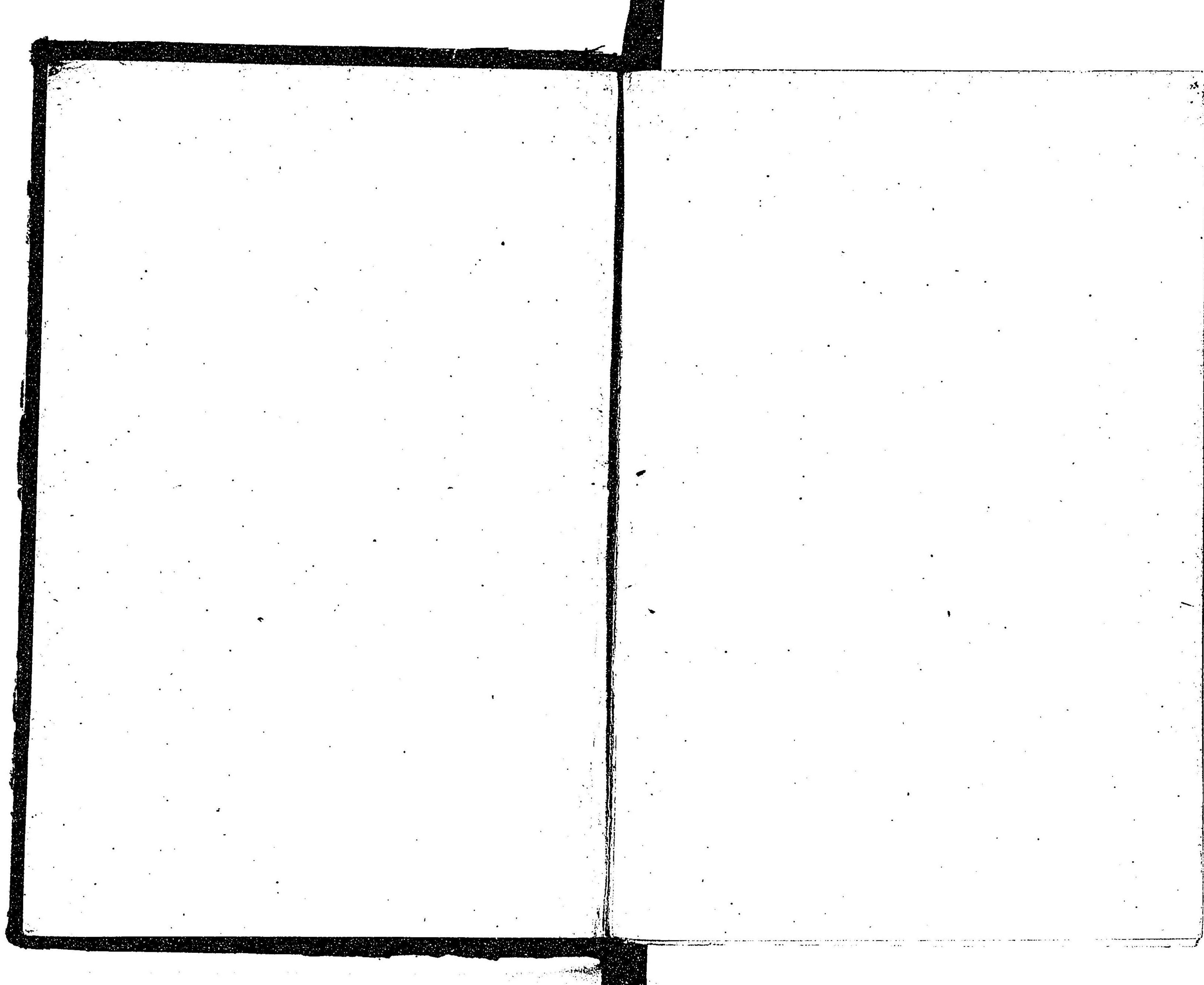
現款

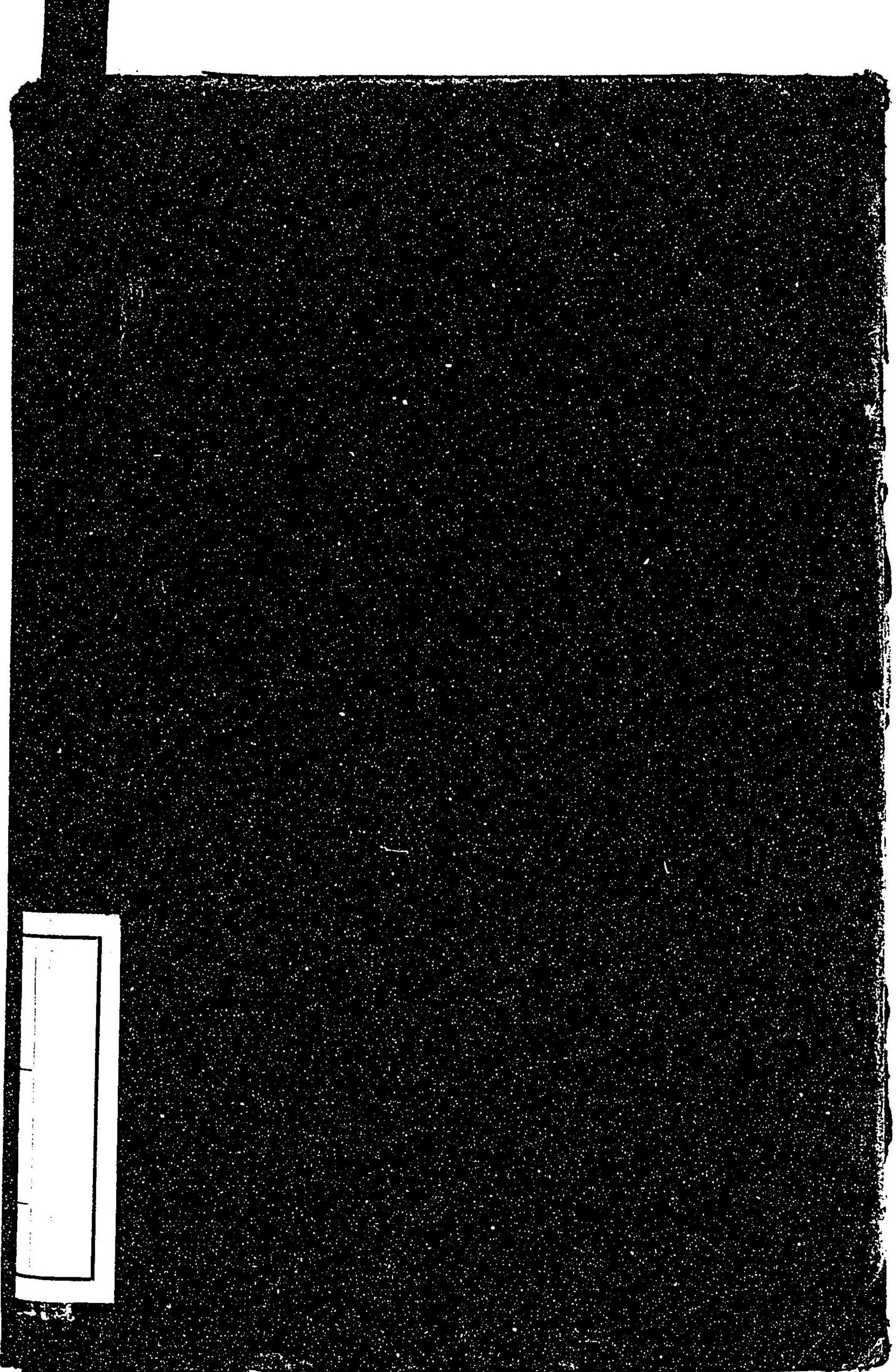
現款

現款

現款

現款





A small, white, rectangular label or sticker is affixed to the left edge of the dark area. The label is oriented vertically and contains some faint, illegible text or markings. It appears to be a library or archival label.